富田林市埋蔵文化財調査報告39

新堂廃寺跡 II

宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告

2007

富田林市教育委員会

富田林市埋蔵文化財調査報告39『新堂廃寺跡Ⅱ　宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告』　正誤表			
頁等	訂正箇所	誤	正
Ｐ２	10行目	事業終了した。	事業を終了した。
Ｐ７	１行目	50cmである溝の	50cmである。溝の
図版１	上段キャプション	（北西から）	（南西から）
図版１	下段キャプション	（南西から）	（北東から）
図版８	中段キャプション	布袋７行基０	布袋ワ行基０

はじめに

富田林市は、大阪府の南東部に位置し、自然環境と歴史的遺産に恵まれた土地です。市域には、国指定史跡の新堂廃寺跡、オガンジ池瓦窯、お亀石古墳をはじめとして、国重要伝統的建造物群保存地区である富田林寺内町など多くの文化財が残っています。

市教育委員会では、このような文化財の保存に努め、埋蔵文化財についても、発掘調査や出土遺物の整理事業などを実施してきました。本書は、宅地造成開発に先立ち行った発掘調査の成果をまとめたものです。今回の調査地は、国史跡、新堂廃寺跡寺域のすぐ西側に位置しており、新堂廃寺跡周辺の状況が少しずつ明らかになってきました。

最後になりますが、発掘調査につきましては、建築主ならびに関係者をはじめとしまして、調査地近隣の皆様方に多大なご協力を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。また、今後とも本市における文化財保護に対するご理解とご協力をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成19年３月

富田林市教育委員会
教育長　堂　山　博　也

例　　言

1．本書は、宅地造成開発に伴い富田林市教育委員会が平成18年度に行った「新堂廃寺跡」の調査概要である。

2．現地調査は、富田林市教育委員会文化財課文化財振興係長　青木昭和の協力の下、同係　藤田徹也が担当した。業務は、平成18年５月に着手し、平成19年３月、本書の刊行をもって終了した。

3．調査にあたっては、水久保祥子、藤野好博、年未亮平、広瀬裕美、西脇由佳の協力を得た。

4．本書の執筆は、藤田、粟田薫、藤野好博が行い、編集は、藤田が行った。各分担は、文末に記している。

5．本書で使用した方位は磁北を表示し、標高は東京湾標準海面値（T.P）で表示した。また、土色、遺物の色調については、小山・竹原編『新版　標準土色帳』を使用した。

6．出土遺物および各種記録類は富田林市立埋蔵文化財センターで保管している。

7．調査の実施および本書の作成にあたっては、下記の方々にご指導・ご協力を頂きました。記して感謝の意を表します。（五十音順　敬称略）

和泉　大樹　　大原　　瞳　　瀬戸　直子　　竹谷　俊彦　　高村　勇士　　田嵜　麻美
西山　昌孝　　前野美智子　　正岡　大実

本　文　目　次

はじめに
例言
目次
第１章 遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
第２章 調査に至る経過と調査の方法
　　１　調査に至る経過 …… 2
　　２　調査の方法 …… 4
第３章 調査の成果
１　基本層序 …… 4
２　遺構 …… 5
　溝 …… 5
　土坑 …… 9
３　出土遺物 …… 16
　須恵器 …… 16
　土師器 …… 17
　瓦 …… 19
　石器 …… 25
第４章　まとめ …… 29

挿　図　目　次

図１　遺跡周辺地図 …… 1
図２　事前調査トレンチ配置図 …… 2
図３　遺構平面図 …… 3
図４　基本層序（Ａ１区南壁） …… 4
図５　ＳＤ１断面図 …… 5
図６　Ａ２区・Ｄ区遺構平面図 …… 6
図７　ＳＤ２・ＳＤ４断面図 …… 7
図８　ＳＤ５断面図 …… 8
図９　ＳＤ６・ＳＤ７断面図 …… 9
図10　ＳＫ２断面図 …… 9
図11　ＳＫ３土器出土状況 …… 10
図12　ＳＫ７土器出土状況 …… 10
図13　Ａ１区遺構平面図 …… 11
図14　ＳＫ10・ＳＫ11断面図 …… 12

図15　ＳＫ13断面図……12
図16　ＳＫ14断面図……13
図17　ＳＫ26断面図……13
図18　ＳＫ27土器出土状況……14
図19　ＳＫ29土器出土状況……14
図20　ＳＫ38土器出土状況……14
図21　Ｂ区遺構平面図……15
図22　須恵器……16
図23　土師器……18
図24　軒丸瓦・丸瓦……20
図25　軒平瓦・平瓦……21
図26　平瓦……23
図27　平瓦……25
図28　大型打製石器・ピエスエスキエ……26
図29　削器……27

写　真　図　版

図版１　（上）調査区遠景（北西から）
（下）調査区遠景（南西から）
図版２　（上）調査区全景（南から）
（下）Ａ２区完掘状況
図版３　（上段左）ＳＫ３土器出土状況
（上段右）ＳＫ７土器出土状況
（中段左）ＳＫ29土器出土状況
（中段右）ＳＫ38土器出土状況
図版４　（下段）ＳＫ27土器出土状況
（上段）Ａ１区・Ｂ区土坑群
（下段左）Ａ１区全景（南から）
（下段右）Ｂ区全景（東から）
図版５　出土遺物　須恵器・土師器
図版６　出土遺物　土師器
図版７　出土遺物　瓦（軒丸瓦・丸瓦）
図版８　出土遺物　瓦（軒丸瓦・丸瓦）
図版９　出土遺物　瓦（平瓦）
図版10　出土遺物　石器

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

新堂廃寺跡の所在する富田林市は、大阪府南東部に位置し、東西約6.5㎞南北約10㎞である。市域は、地形により３つに分けて捉えることが出来る。和泉山脈を源とし市域中央を北へと貫流する石川により形成された平野、その西側に位置し和泉山脈から派生し羽曳野市域までのびる羽曳野丘陵、石川右岸に所在し市域を眺望できる金胎寺山や嶽山などの和泉山脈に連なる山々である。当遺跡は、行政区分上、富田林市緑ケ丘町にあたり、羽曳野丘陵と石川左岸に広がる中位段丘との境に位置している。

新堂廃寺跡は、その北西側に築かれ造営主体者の埋葬施設と考えられているお亀石古墳、両遺跡の中間に築かれ瓦を供給していたオガンジ池瓦窯とともに、平成14年に国指定史跡に登録されている。

今次調査地は史跡指定された新堂廃寺跡の西側に位置し、寺域の外にあたる。寺域外に関する調査は、寺域の北西側（1985年富田林市教育委員会調査）、南側（1998年大阪府教育委員会調査）、南西側（2004年富田林市遺跡調査会調査）において行われている。北西側と南側においては、寺院に関連すると考えられる溝が検出されている。南西側においては、オガンジ池瓦窯で焼成された瓦を柱穴に敷く庇付き掘立柱建物が検出されている。各遺構から、７～８世紀に比定される土器類や飛鳥期～天平期にかけての瓦が出土している。（藤野）

図１　遺跡周辺地図

第２章 調査に至る経過と調査の方法

１．調査に至る経過

民間会社より富田林市緑ヶ丘町において宅地造成の計画が出された。当該地は、国指定史跡「新堂廃寺跡附　オガンジ池瓦窯・お亀石古墳」に近接し、遺跡「新堂廃寺跡」内であったため、市教育委員会は、平成16年５月に事前調査を行い、遺構・遺物の出土を確認し、その状況をもとに民間会社との協議を行った。

協議の結果、遺構面までの掘削深度等の判断から個々の宅地予定部分においては、盛土により遺跡保存を努める事になり、発掘調査については、地下埋設物を設けるため遺跡の破壊を受ける可能性のある道路施設部分について行う事になった。

調査面積は、試掘調査を含め約1200㎡で、５月から８月まで現地調査を行い、一部の内業整理は現地調査と並行し行い、本書の刊行をもって事業終了した。

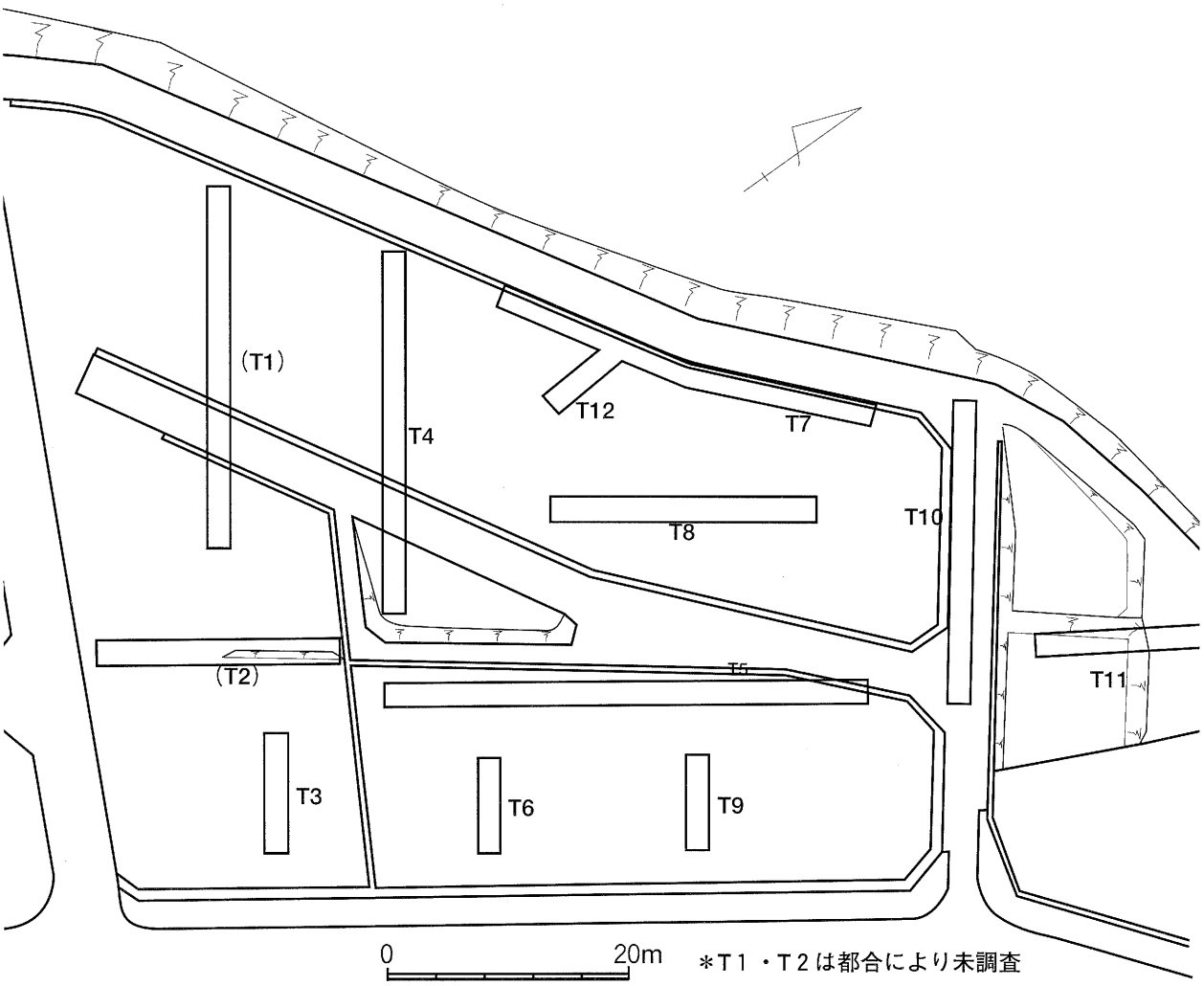


図２　事前調査トレンチ配置図

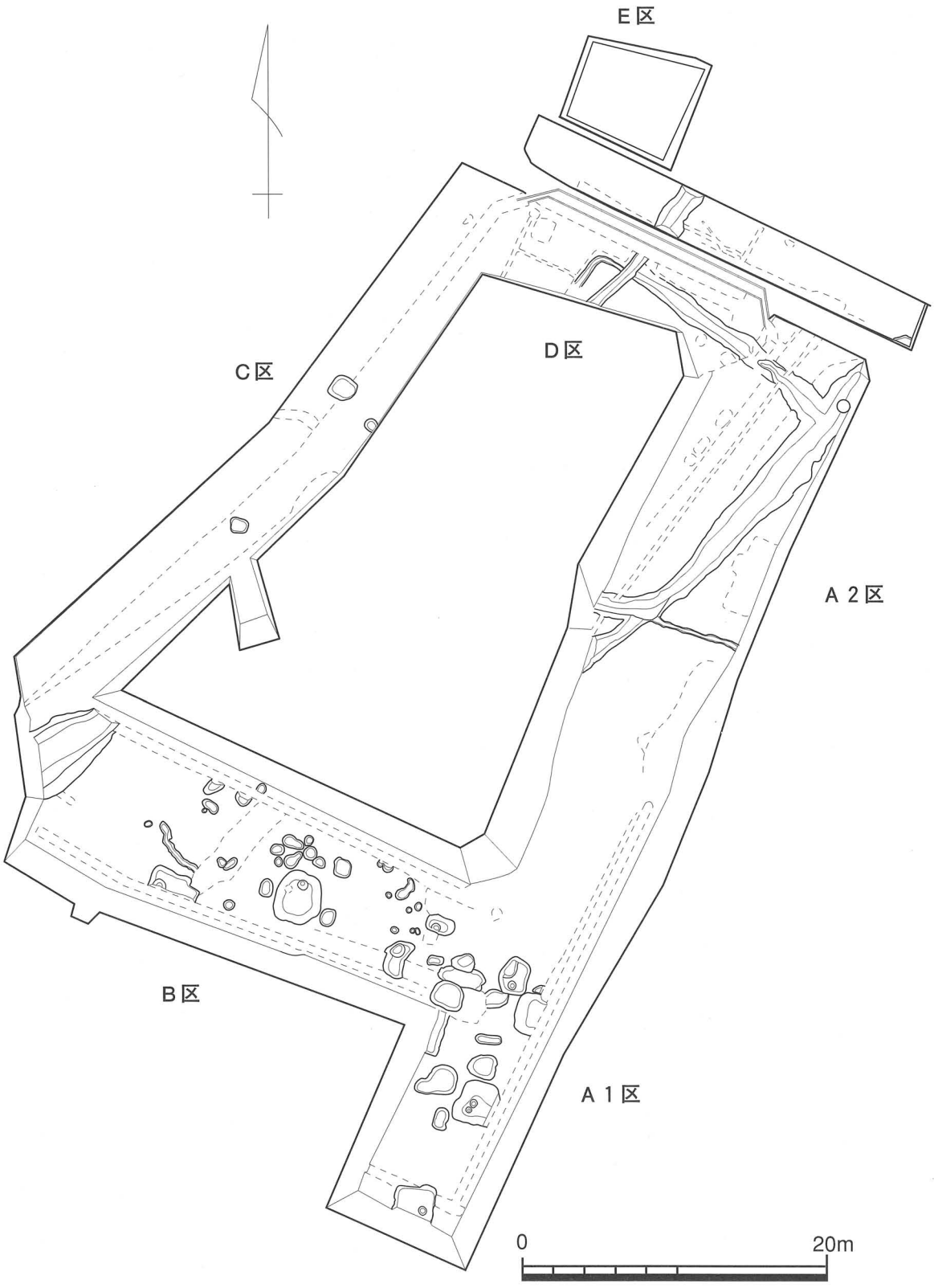


図 3　遺構平面図

2．調査の方法

試掘調査の結果から、調査区南側においては、現地表面から遺構面までの深度が約２ｍにおよぶことがわかった。このため、深度が深い場所においては、調査区壁面を約45度ののり面を設けることとし、また、雨などにより壁面が崩れることを避けるため、随時、犬走り状の段を設けた。調査区は、施設道路部分を対象としたため調査範囲が多方面に渡り、調査区内側を廃土置き場としたため、国土座標等による区分けが困難であった。そのため、特に機械掘削時や遺構面精査中に出土した遺物の出土地を明確にするため、便宜上調査区をＡ区（Ａ区のみ遺構確認後Ａ１・Ａ２区）からＥ区に分けて遺物の取り上げを行った。

第３章　調査の成果

1．基本層序

今次調査区周辺の地形は、西側が羽曳野丘陵縁部にあたり、北側が羽曳野丘陵から東側にやや張り出した形の斜面となる。調査前の現状では、西側と北側から伸びる斜面が掘削され平坦面が形成されていた。このため、調査区西側や北側では、既存のアスファルトや地表面の直下が地山となる。ここでは、調査区全体の中で最も遺構面までの深度が深く、かつ良好に残っていたＡ区南側壁面の状況を説明する。

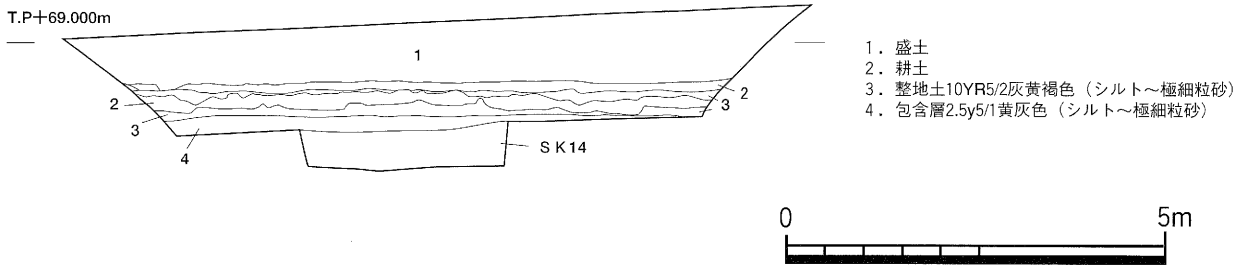


図４　基本層序（Ａ１区南壁）

１層は、盛土である。場所によって層厚は異なるが約70cm～100cmほどであるが、先述したように主に調査区西側や北側に位置する調査区Ｃ・Ｄ・Ｅ区は、この盛土や次に示す耕土、整地土は見られず、現地表面や、アスファルト直下地山となる。２層は、耕土である。層厚、約30cmを計る。３層は、２層目の耕土に伴う整地土である。図４では、３層整地土の間に１層入っているが、これは、２層耕土にあたるもので、矢板の抜き取り痕である。図面でみられるように、調査の安全を図り、壁面傾斜角度を通常よりも多くとったため、真上に抜き取られた場合でも、矢板を打ち込む際に、矢板の間に入り込んだ耕土が残る。壁面を垂直に観察した場合、撹乱痕のような状況で確認できるのであるが、観察している壁面の角度がきつい為、このような形となる。したがって、本来垂

直な壁面で観察した場合の３層の層厚は約40cmである。４層は、調査区南側にのみみられる層で、地山の上に堆積した言わば包含層である。ただし、その層厚は一定ではなく、調査区南側においても、３層の整地土を取り除き地山となる個所も多数みられる。包含層のほとんどは、整地される段階で掘削されていたものと考えられる。

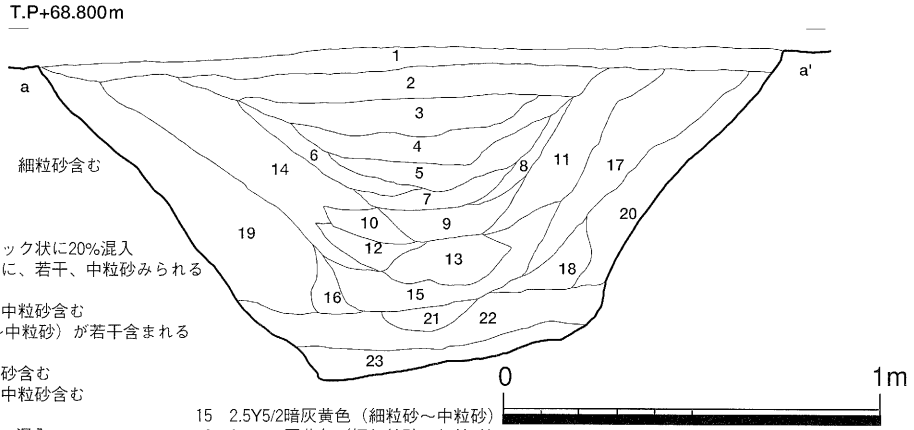
２．遺構

溝（図５・７～９）

ＳＤ１

調査区北西側で検出した。幅約２ｍ、深さ約１ｍである。溝底面に堆積していた23層は2.5Ｙ６/２灰黄色（極細粒砂～細粒砂、中粒砂混じる）であり、また22層のシルトと極細粒砂で構成される基本埋土の中に2.5Ｙ６/１灰黄色の細粒砂が横筋状に混入していることから、水が流れていた痕跡であると考えられる。21層に見られるように、22層をえぐるような形で砂が堆積している。その後も、11・14・16・17・18・19・20層のような溝方部地山に類似する土が混入する断面中央方向に落ち込む層が確認でき、方崩れしながら少なくとも４層までは、流水している状況が確認できた。３層には地山土がブロック状の塊で混在しており、人為的な埋め戻しが行われた可能性が高いが、この層からの出土遺物は確認できず、埋め戻しされた時期は不明である。

溝底面は、南西側が高く、北東側が低いため、水は北東方向に流れていたものと考えられるが、調査区の地形は全体的に西から東方向へと傾斜しており、自然地形とは異なる水の流れが想定できる。後述するＳＤ４との関連を踏まえると、調査区のすぐ西側にある羽曳野丘陵からの流水が東側の新堂廃寺に流れ込む事を防ぐために設けられた溝であると考えられる。



1　2.5Y6/2灰黄色（極細粒砂～細粒砂）若干　細粒砂含む
2　2.5Y5/2暗灰黄色（シルト～極細粒砂）に
　2.5Y6/2灰黄色（極細粒砂～細粒砂）混入
3　2.5Y5/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）に
　2.5Y4/1黄灰色（シルト～極細粒砂）ブロック状に20%混入
4　2.5Y3/1黒褐色（粘土～シルト）　層底部に、若干、中粒砂みられる
5　5Y5/1灰色（粘土～シルト）
6　2.5Y6/2灰黄色（極細粒砂～細粒砂）若干中粒砂含む
7　5Y5/1灰色（粘土～シルト）に（細粒砂～中粒砂）が若干含まれる
8　2.5Y5/2暗灰黄色（シルト～極細粒砂）
9　2.5Y5/1黄灰色（粘土～シルト）若干中粒砂含む
10　2.5Y6/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）若干中粒砂含む
11　5Y6/1灰色（シルト～極細粒砂）に
　2.5Y4/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）が20%混入
12　2.5Y6/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）に同色のシルト質が20%混入
13　2.5Y5/1黄灰色（粘土～シルト）※９層よりも粘性強い
14　2.5Y6/2灰黄色（シルト～極細粒砂）に
　2.5Y6/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）30%混入
15　2.5Y5/2暗灰黄色（細粒砂～中粒砂）
16　2.5Y6/2灰黄色（極細粒砂～細粒砂）
17　2.5Y6/2灰黄色（シルト～極細粒砂）に地山ブロック30%混入
18　5Y5/1灰色（極細粒砂～細粒砂）
19　2.5Y5/6黄褐色（シルト～極細粒砂）の地山ブロックに
　2.5Y6/2灰黄色（シルト～極細粒砂）20%混入
20　基本的に19層と同じ
21　2.5Y6/1黄灰色（細粒砂～中粒砂）
22　2.5Y5/1黄灰色（シルト～極細粒砂）に
　2.5Y6/1黄灰色（細粒砂～中粒砂）が30%混入
23　2.5Y6/2灰黄色（極細粒砂～細粒砂）に中粒砂10%程度混入

図５　ＳＤ１断面図

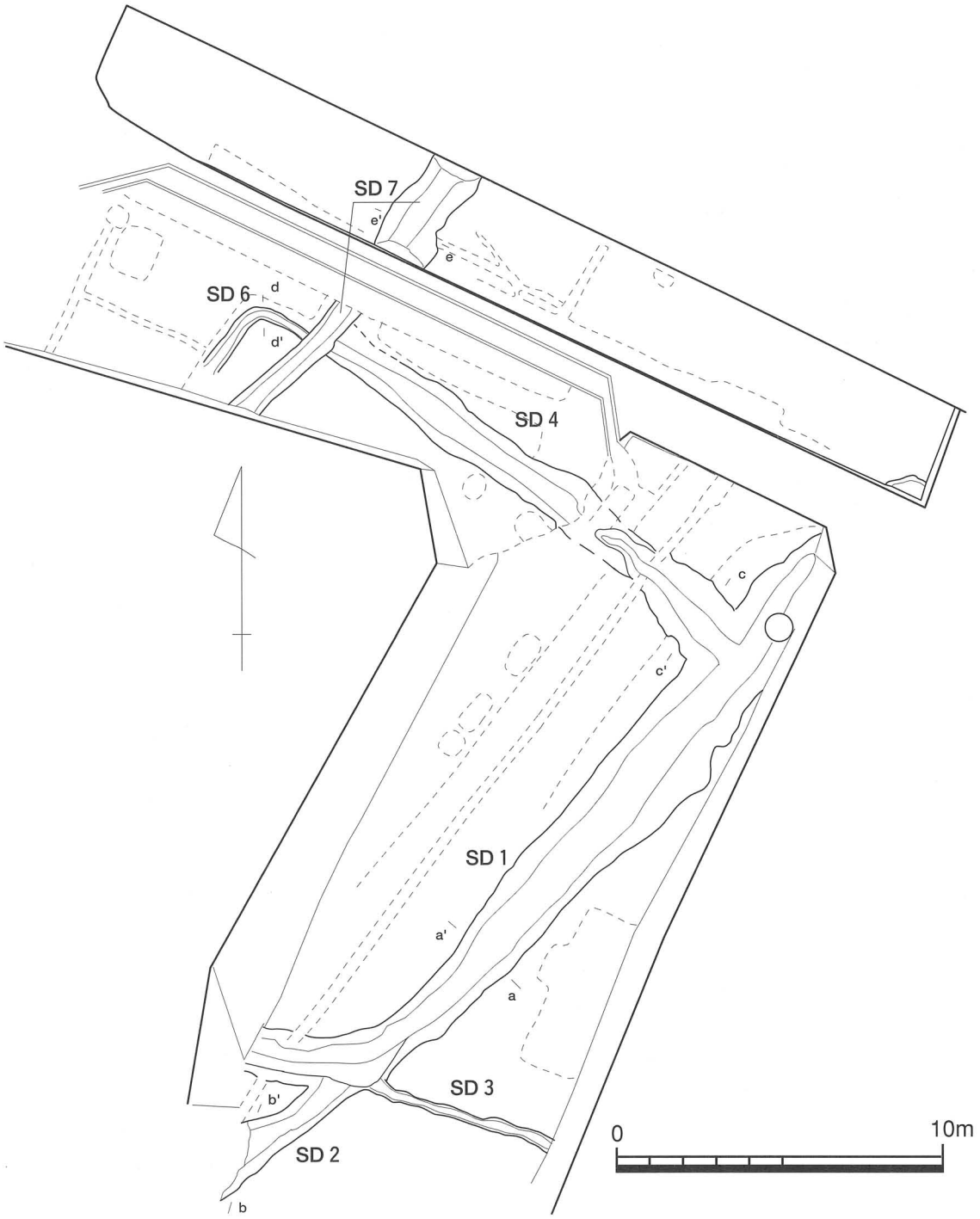
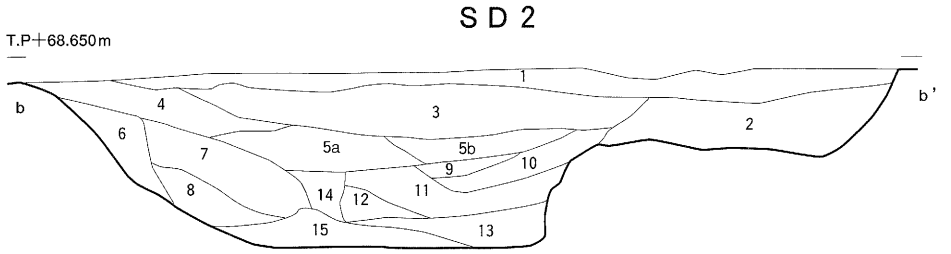


図6　A２・D区平面

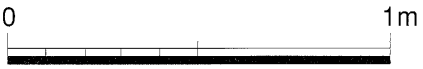
ＳＤ２

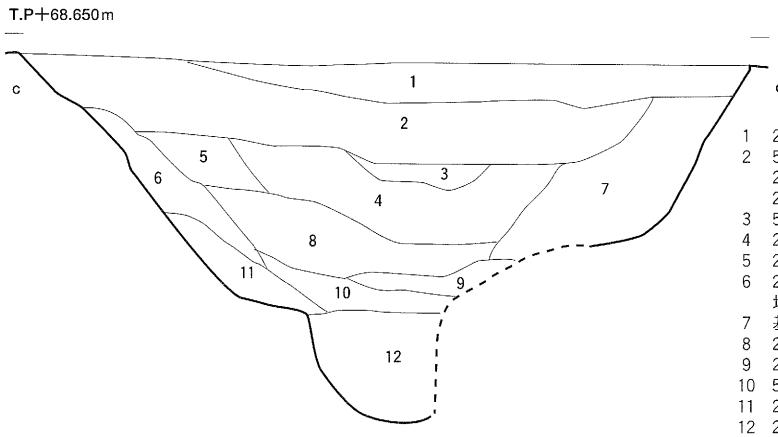
幅約１ｍ、深さは最も深いところで50cmである溝の北側底面は高く深度は10cm程度となりＳＤ１と重なる。断面の観察からＳＤ１に切られている状況がみられる。方向軸はＳＤ１と同一であり、ＳＤ１は、ＳＤ２と重なる部分から軸が西側へと変わるので、本来はＳＤ１とＳＤ２は同一溝であった可能性がある。

しかし、溝の底の深度はＳＤ１の場合、北側が低いのに対し、ＳＤ２の場合、南側が深くなるので、水の流れる方向は逆方向になる。水の流れを変える目的で新たにＳＤ１を掘削した可能性もあるが、いずれの溝も調査区南側に対応する溝が確認できていないため、本来の溝の構築目的は不明である。



1　2.5Y6/2灰黄色（シルト～極細粒砂）に
　2.5Y6/6明黄褐色（シルト～極細粒砂）の地山ブロック20%混入
2　2.5Y5/1黄灰色（シルト～極細粒砂）に地山ブロック20%混入
3　2.5Y5/2暗灰黄色（シルト～極細粒砂）に地山ブロック20%混入
4　2.5Y4/1黄灰色（シルト～極細粒砂）
5a 2.5Y5/1黄灰色（粘土～シルト）若干　細粒砂混じる
5b 2.5Y6/1黄灰色（シルト～極細粒砂）
6　2.5Y5/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）
7　2.5Y5/1黄灰色（シルト～極細粒砂）
8　2.5Y5/2暗灰黄色（シルト～極細粒砂）に地山ブロック10%混入
9　2.5Y3/1黒褐色（粘土～シルト）
10　2.5Y6/1黄灰色（シルト～極細粒砂）に地山ブロック10%混入
11　2.5Y6/2灰黄色（シルト～極細粒砂）若干　細粒砂含む
12　基本的に11層と同じ　地山ブロック大量に混入
13　2.5Y6/1黄灰色（シルト～極細粒砂）に
　2.5Y6/3にぶい黄褐色（シルト～極細粒砂）30%混入
14　2.5Y5/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）
15　2.5Y5/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）に
　2.5Y6/3にぶい黄褐色（極細粒砂～細粒砂）30%混入





1　2.5Y6/2灰黄色（シルト～極細粒砂）
2　5Y6/1灰色（極細粒砂～細粒砂）に
　2.5Y3/1オリーブ黒色（粘土～シルト）と
　2.5Y5/1灰色（シルト～極細粒砂）が混入
3　5Y6/1灰色（極細粒砂～細粒砂）
4　2.5Y6/2灰黄色（シルト～極細粒砂）
5　2.5Y5/2暗灰黄色（シルト～極細粒砂）
6　2.5Y5/2暗灰黄色（シルト～極細粒砂）若干細粒砂混入
　地山ブロック混入
7　基本的に６層と同じ土色で地山ブロックの混入多い
8　2.5Y6/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）中粒砂含む
9　2.5Y6/1黄灰色（細粒砂～中粒砂）
10　5Y6/1灰色（細粒砂～中粒砂）
11　2.5Y4/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）
12　2.5Y6/1黄灰色（細粒砂～中粒砂）と
　2.5Y6/2灰黄色（細粒砂～中粒砂）と
　2.5Y5/1黄灰色（細粒砂～中粒砂）が混在

図７　ＳＤ２・４断面図

ＳＤ４

西側から東側に向かって高度を下げＳＤ１に繋がる溝である。途中、後世の耕作面造成による段差のため掘り方が削られている。ＳＤ１との切りあい関係からＳＤ１の方が新しい掘削であると考えられるが、溝の底部では、明確に分層できなかった。また、ＳＤ１とＳＤ４が合流する付近で流木を検出した。流木は、ＳＤ１とＳＤ４にまたがった形で検出していることから、当初は、同時期に機能しており、ＳＤ４からの流水によって合流付近が堆積しＳＤ１を掘削し直したものと推察される。ただし、最終的には、ＳＤ１のみが溝としての機能を有していたものと考えられる。

ＳＤ５

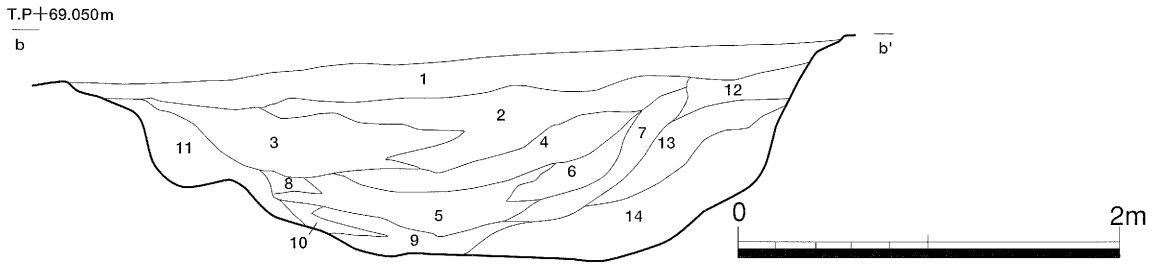
調査区南西側で検出した。周囲の状況から南西から北東方向へと流れる溝であったと考えられるが、両端が調査区外へと延びるため詳細は不明である。幅は約４ｍ、深さは約1.1ｍを測る。遺構面の上層より掘り方の落ちが確認できるため、遺構掘削時期は、他の遺構より新しいものと考えられる。

ＳＤ６

調査区北側で検出した。幅約50cm、深さ約10cmで、緩やかなカーブを描きながらほぼ直角に曲がる溝である。検出した周辺区域は、後世に地盤改良された土が現地表面まで埋まっており、検出した面自体が削平されている可能性が高い。隣接するＳＤ４やＳＤ７との関連性は不明であるが、ＳＤ４が序々に浅くなりながら西側に続いたものと考えると、ＳＤ４が埋没した後に造られたものと考える事ができるが、時期の特定できる遺物はなく詳細は不明である。

ＳＤ７

現在の用水路を挟んで、南北方向軸の溝である。先述したように、ＳＤ７の南側は、遺構面が削平されている可能性が高いため、掘り方は北側よりも一段下がる形となり、堆積状況も２層は共通



1　10YR5/2灰黄褐色（シルト～極細粒砂）に
　5Y5/1灰色（シルト～極細粒砂）混入
2　2.5Y5/2暗灰黄色（極細粒砂～細粒砂）に
　2.5Y4/1黄灰色（シルト～極細粒砂）と
　2.5Y4/2灰黄色（シルト～極細粒砂）混入
3　2.5Y5/1黄灰色（粘土～シルト）
4　2.5Y4/3オリーブ褐色（シルト～極細粒砂）に
　10YR6/1褐灰色（シルト～極細粒砂）混入
5　2.5Y6/1黄灰色（粘土～シルト）
6　10YR5/1褐灰色（シルト～極細粒砂）
　若干　細粒砂～中粒砂混入
7　10YR5/1褐灰色（シルト～極細粒砂）
　N6/灰色（粘土～シルト）混入
8　2.5Y6/1黄灰色（粘土～シルト）に
　若干　細粒砂含む
9　N6/灰色（粘土～シルト）に
　7.5Y6/1灰色（極細粒砂～細粒砂）混入
10　2.5Y6/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）
11　2.5Y6/2灰黄が色（極細粒砂～細粒砂）に
　5Y4/1灰色（粘土～シルト）ブロック状に混入
12　2.5Y5/6黄褐色（シルト～極細粒砂）に
　2.5Y5/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）混入
13　10YR5/1褐灰色（シルト～極細粒砂）に
　2.5Y6/2灰黄色（シルト～極細粒砂）混入
14　2.5Y6/2灰黄色（シルト～極細粒砂）に
　5Y4/1灰色（シルト～極細粒砂）と地山ブロックが
　ブロック状に混入

図８　ＳＤ５断面図

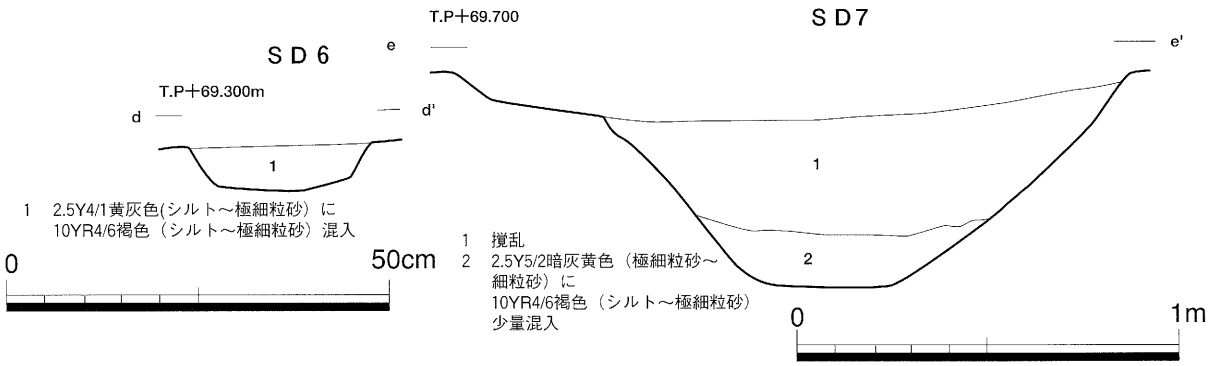


図９　ＳＤ６・ＳＤ７断面図

するものの、１層は、北側にのみ見られる。

１層には、塩化ビニール状のパイプなどとともに大量の瓦が敷き詰められていた。当該地は、調査前まで道路が敷かれており、道路を敷く際、周囲の地山と比べ地盤の弱い溝部分にのみバラスのような形で瓦を意図的に敷き詰めたものと考えられる。

土坑（図10～12・14～20　写真３・４）

土坑は、調査区南東側で集中して検出した。隅丸方形あるいは、方形状を呈し、１ｍ前後の深さを持つものと、平面楕円形状を呈し、比較的浅いものの大きく２種類に分けられる。

前者の大きい土坑は、ＳＫ26・33・２・11・４・８・10・64・14などが挙げられる。この内、26・２・64・10・14には、底部分にさらにピット状の落ち込みがある。検出面から約１ｍ下の土坑底面から更に落ちる状況を考えると、周辺のピットとの関連性は希薄であり、また、埋土の観察からいずれのピット状落ち込みも土坑底面に堆積するものと同様の状況であることから、土坑に伴う落ち込みであるものと考えられる。

ＳＫ２

幅約２ｍ、深さ約80cmを測る。東側の一部は調査区外へ延びるが、ほぼ方形状の平面形を呈す。

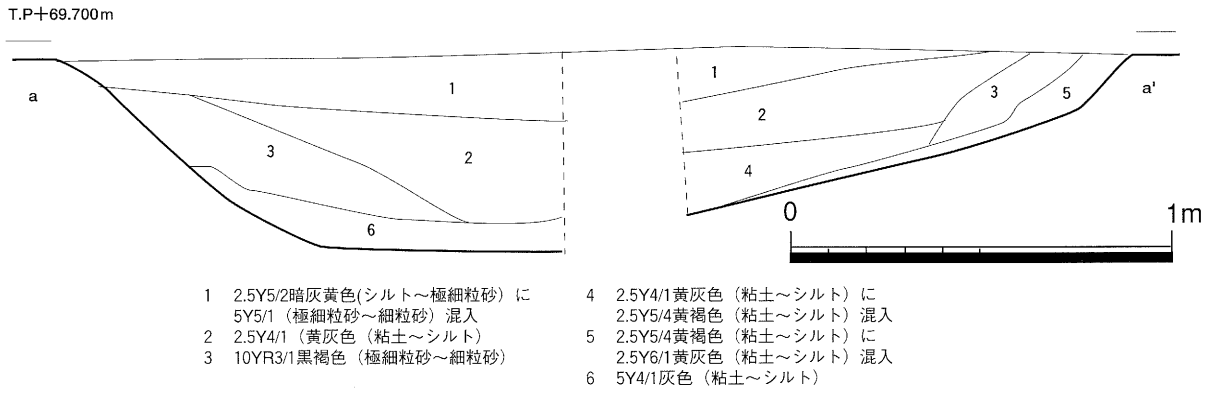


図10　ＳＫ２断面図

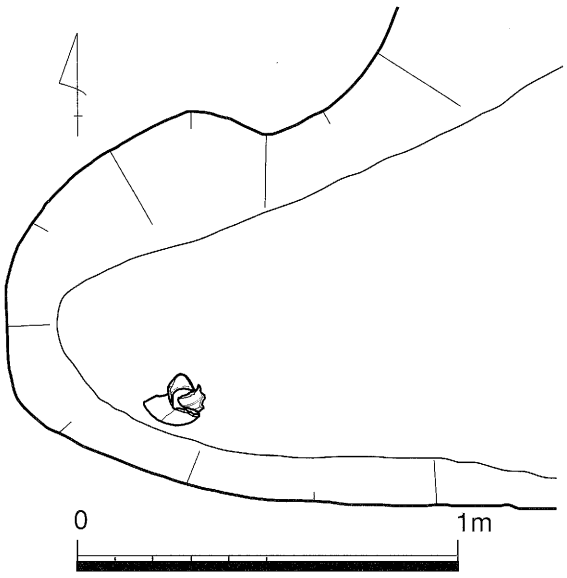


図11　ＳＫ３土器出土状況

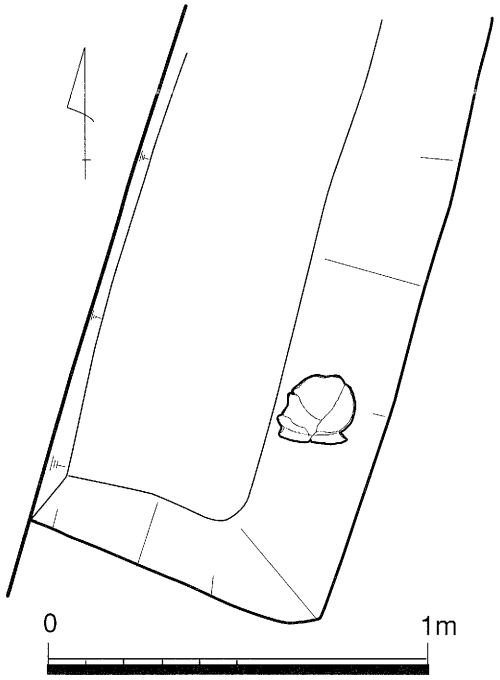


図12　ＳＫ７土器出土状況

埋土は、基本的に水平堆積の状況が見られるが、方部付近の３層は、遺構中央に向かって、斜めに落ちている。断面を確認するために残した畦を掘削したところ、遺構の底面より、２つのピット状の落ち込みを確認した。畦掘削後に検出したため、土坑との切り合い関係などは不明であるが、埋土の状況は、６層の埋土と類似しており、埋没時期はほぼ同じであると考えられる。

ＳＫ３

東西方向軸約３ｍを測る土坑である。平面の形状では、円形の遺構が２つ重なっているように見えるが、断面の観察では、１層が堆積しているのみで、切り合いなどの確認ができなかったため、１つの遺構と判断した。遺構の西端で平瓶が出土した。平瓶は、口縁部が上を向く状況で出土しており、遺構面検出の段階から一部露呈していた。

ＳＫ７

調査区壁面側で検出したため、遺構の形状や深さなどは不明である。土師器甕の約半分が、内面を上に向ける状態で、遺構方部から出土している。

ＳＫ10

東西方向軸約２ｍ、南北方向軸約2.5ｍ、深さは約40㎝を計る。埋土は大きく２層に分かれる。１層は、灰色（N4/）に黄褐色系の地山土がまばらに混在しており、ブロックごとのまとまりはなく分層をするには至らなかったものの、人為的な埋め戻しが想定できる。２層は、やや粘質性のつよい黄灰色系の土であり、縦状に鉄分の沈着がみられた。断面観察の畦を掘削後、遺構底部南側で約20㎝の深さを測るピット状の落ち込みを確認した。埋土は、２層と同様の様相を示しており、切り合い関係は不明である。瓦が出土しているが、遺構の所属時期は不明である。

ＳＫ11

調査区壁面側で検出した。事前調査の機械掘削中に遺構の一部を掘削してしまい、遺構の径は明確にはできないが、残存している箇所の様子から、南北方向軸約２ｍであったと考えられる。深さは約70㎝である。他の同規模の土坑とは異なり、人為的な埋め戻しによる堆積は認められず、自然堆積によるものと考えられる。

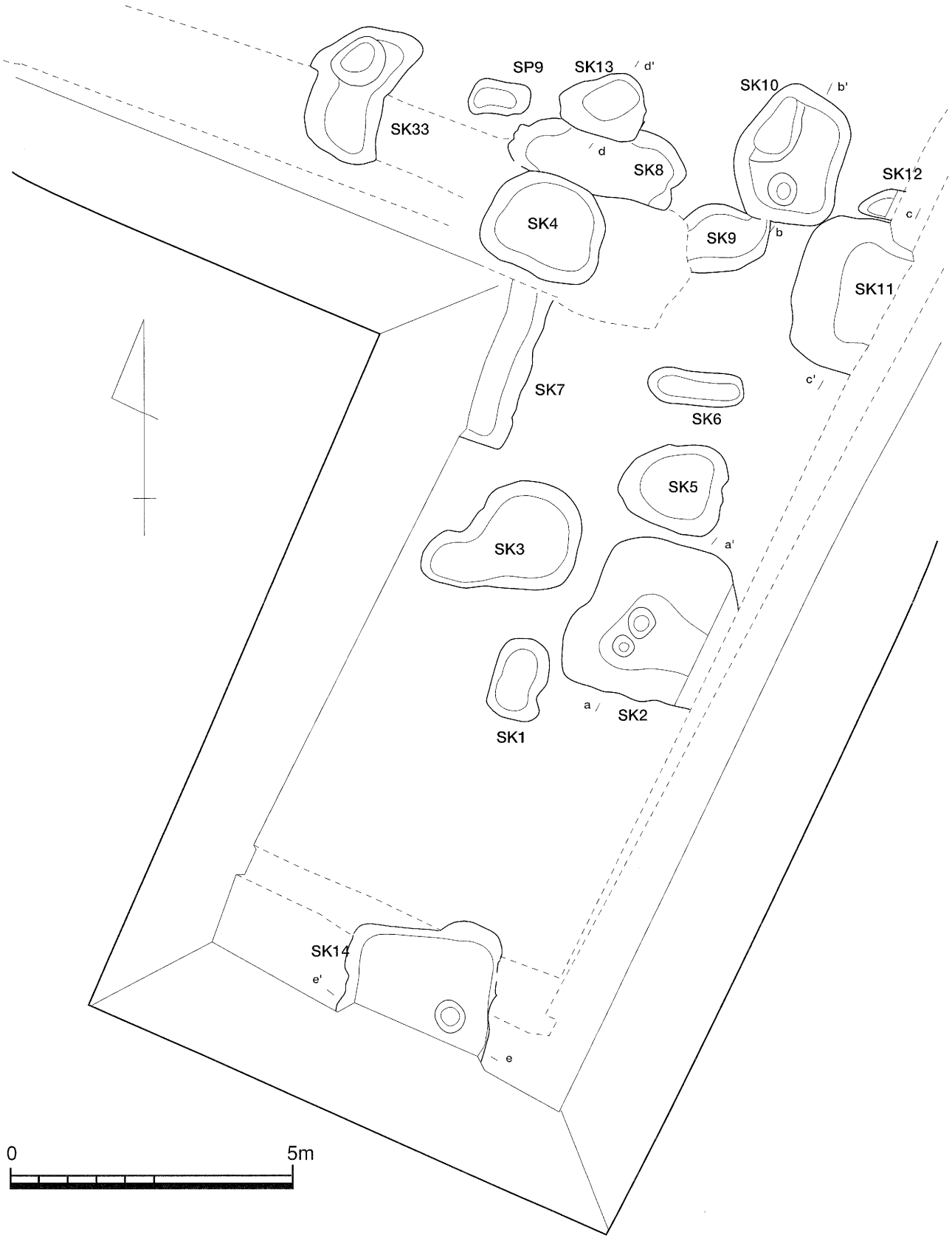
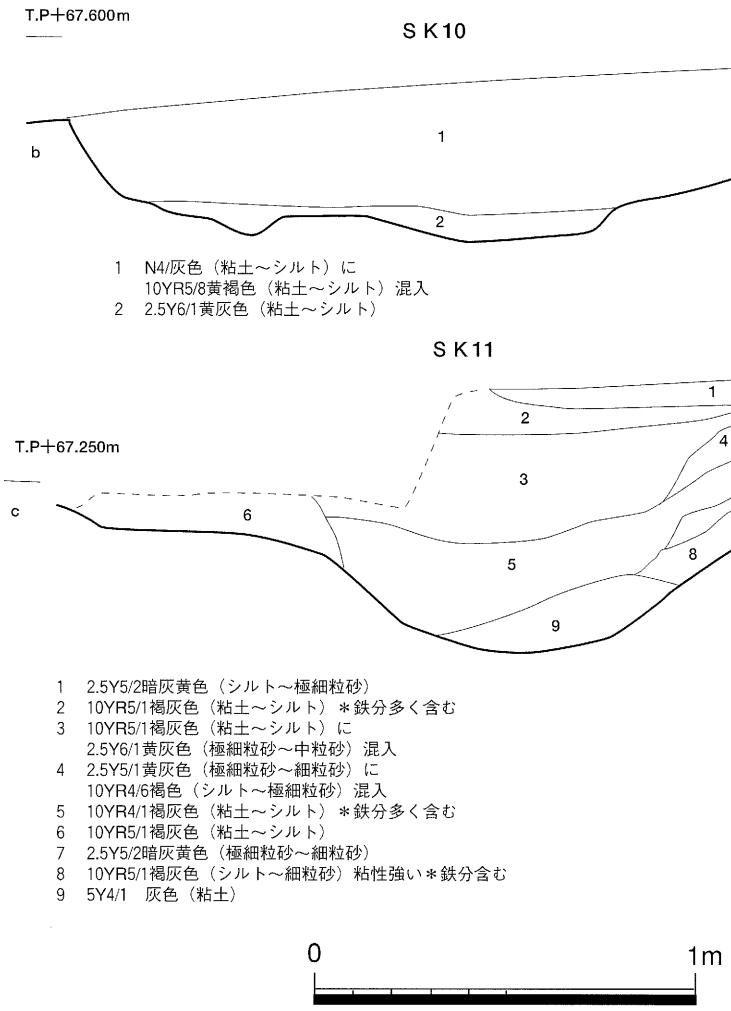

SP9
SK13
d'
SK10
b'
SK33
d
SK8
SK12
c'
SK4
SK9
b
SK11
SK7
SK6
c'
SK5
SK3
a'
a
SK2
SK1
SK14
e'
e
0
5m

図13　A１区平面図



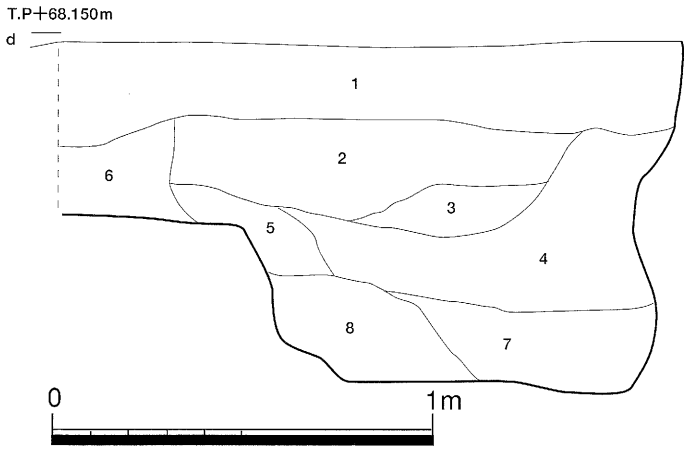
1　N4/灰色（粘土～シルト）に
　10YR5/8黄褐色（粘土～シルト）混入
2　2.5Y6/1黄灰色（粘土～シルト）

1　2.5Y5/2暗灰黄色（シルト～極細粒砂）
2　10YR5/1褐灰色（粘土～シルト）＊鉄分多く含む
3　10YR5/1褐灰色（粘土～シルト）に
　2.5Y6/1黄灰色（極細粒砂～中粒砂）混入
4　2.5Y5/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）に
　10YR4/6褐色（シルト～極細粒砂）混入
5　10YR4/1褐灰色（粘土～シルト）＊鉄分多く含む
6　10YR5/1褐灰色（粘土～シルト）
7　2.5Y5/2暗灰黄色（極細粒砂～細粒砂）
8　10YR5/1褐灰色（シルト～細粒砂）粘性強い＊鉄分含む
9　5Y4/1　灰色（粘土）

図14　ＳＫ10・11断面図

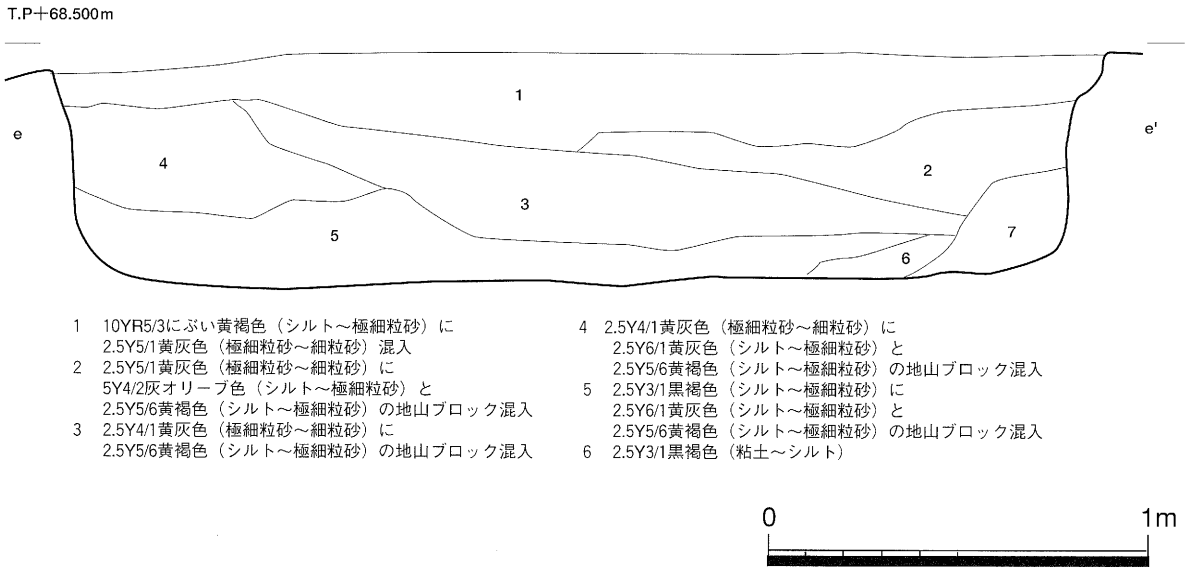
ＳＫ13

ＳＫ８と接する形で検出した。隣接するＳＫ８のほとんどは、事前調査による機械掘削により上面が削平されてしまったが、わずかに残った断面の観察から６層はＳＫ８の埋土であると判断した。１層は、周辺遺構にみられる傾向の土で、遺構の上面に覆う土である。基本層序で示した４層に類似する土で、必ずしも調査区南側で検出した遺構全部で確認できたわけではないものの、概ね中世以降に当該地が耕作地として利用する段階において整地がおこなわれた際、深い遺構に入り込んだ土であると考えられる。ただし、ＳＫ13の埋土全体にブロック状の地山土が混入しており、１層とは時間的な差異がある可能性はあるものの、人為的な埋め戻しが確認できる遺構である。出土遺物として器種不明の土師器が挙げられるが時期の特定はできなかった。



1　10YR5/2灰黄褐色（シルト～極細粒砂）に
　10YR5/6黄褐色（粘土～シルト）の地山ブロック混入
2　2.5Y4/1黄灰色（粘土～シルト）
3　2.5Y4/2暗灰黄色（シルト～極細粒砂）に
　10YR5/6黄褐色（粘土～シルト）の地山ブロック混入
4　10YR5/1褐灰色（シルト～極細粒砂）に
　2.5Y4/2暗灰黄色（粘土～シルト）と
　10YR5/6黄褐色（粘土～シルト）の地山ブロックが混入
5　2.5Y6/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）に
　10YR5/6黄褐色（粘土～シルト）の地山ブロック混入
6　5Y5/1灰色（シルト～極細粒砂）に
　10YR5/6黄褐色（粘土～シルト）の地山ブロック混入
7　N4/灰色（粘土～シルト）に
　10YR5/6黄褐色（粘土～シルト）の地山ブロック混入
8　N4/灰色（粘土～シルト）に
　10YR4/2灰黄褐色（シルト～極細粒砂）と
　10YR5/6黄褐色（粘土～シルト）の地山ブロック混入
9　10YR4/1黄灰色（粘土～シルト）に
　10YR5/6黄褐色（粘土～シルト）の地山ブロック混入

図15　ＳＫ13断面図



1　10YR5/3にぶい黄褐色（シルト～極細粒砂）に
　2.5Y5/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）混入
2　2.5Y5/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）に
　5Y4/2灰オリーブ色（シルト～極細粒砂）と
　2.5Y5/6黄褐色（シルト～極細粒砂）の地山ブロック混入
3　2.5Y4/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）に
　2.5Y5/6黄褐色（シルト～極細粒砂）の地山ブロック混入
4　2.5Y4/1黄灰色（極細粒砂～細粒砂）に
　2.5Y6/1黄灰色（シルト～極細粒砂）と
　2.5Y5/6黄褐色（シルト～極細粒砂）の地山ブロック混入
5　2.5Y3/1黒褐色（シルト～極細粒砂）に
　2.5Y6/1黄灰色（シルト～極細粒砂）と
　2.5Y5/6黄褐色（シルト～極細粒砂）の地山ブロック混入
6　2.5Y3/1黒褐色（粘土～シルト）

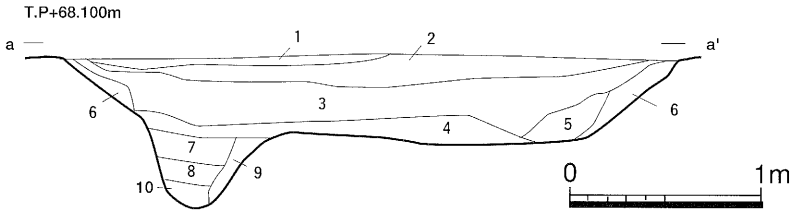
図16　ＳＫ14断面図

ＳＫ14

Ａ１区の最も南側で検出した。遺構の一部は調査区外へと延びるため全容は不明であるが、概ね方形状の土坑である。この遺構の底面からも断面畦掘削後にピット状の落ち込みを確認している。畦掘削後であるので、断面図５層との切り合い関係は不明であるが、他の遺構と同様に基本的な埋土は下層である５層と類似する傾向にあり、埋没時期は、ほとんど同時期であると考えられる。２層から５層までは、いずれにも2.5Ｙ５/６黄褐色の地山ブロックが混入しており、先に述べたように、人為的な埋め戻ししたものと推定される。６・７層は、埋土は異なるがいずれも他の層よりも粘性が強かった。遺構からは、瓦や須恵器が出土している。

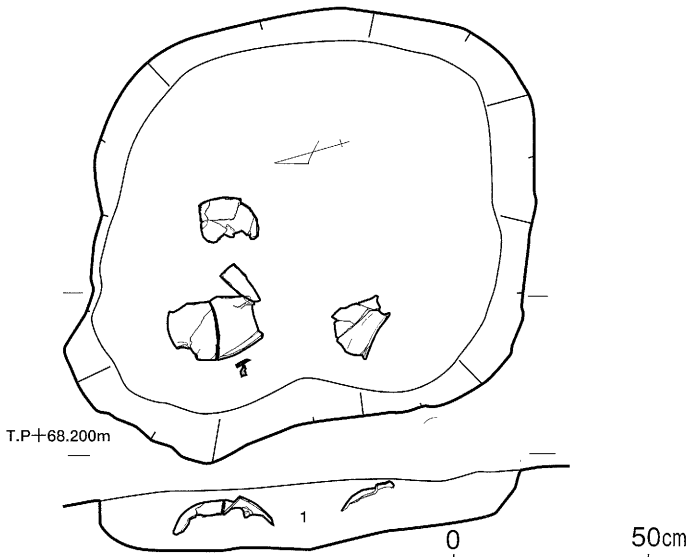
ＳＫ26

Ｂ区ほぼ中央で検出した。東西方向軸約３ｍ、南北方向軸約3.2ｍ、深さ約45㎝を測る。遺構の北側にピット状の落ち込みがある。ピット状の落ち込みは、土坑底面よりさらに40㎝ほど落ち込んでいる。ピット状の落ち込みの埋土は、土坑底面に堆積している４層とは類似しているものの、７層の方が粘性を増していた。ピット状の落ち込みが埋没した後に４層が堆積したものと考えられるが、断面や平面形態での観察では、土坑に付随するものとしてピット状の落ち込みが掘削されたものか否かは判断できなかった。また、１・２層には、地山



1　2.5Y5/3黄褐色（シルト～極細粒砂）に
　10YR5/6黄褐色（シルト～極細粒砂）の地山ブロック混入
2　10YR4/1褐灰色（粘土～シルト）に
　10YR5/6黄褐色（シルト～極細粒砂）の地山ブロック混入
3　10YR6/1褐灰色（粘土～シルト）
4　2.5Y6/1黄灰色（シルト～極細粒砂　若干細粒砂混じる）に
　10YR5/6黄褐色（シルト～極細粒砂）の地山ブロック混入
5　2.5Y5/1黄灰色（粘土～シルト）に
　10YR5/6黄褐色（シルト～極細粒砂）の地山ブロック混入
6　5Y5/1灰色（シルト～極細粒砂　若干細粒砂混じる）に
　10YR5/6黄褐色（シルト～極細粒砂）混入
7　5Y6/1灰色（粘土～シルト）＊鉄分の沈着がみられる
8　2.5Y5/1黄灰色（粘土～シルト）
9　2.5Y6/1黄灰色（粘土～シルト　若干極細粒砂混じる）
10　2.5Y5/1黄灰色（粘土～シルト）に
　10YR5/6黄褐色（粘土～シルト）の地山ブロック混入

図17　ＳＫ26断面図



1　2.5Y5/2灰黄色（粘土～シルト）に
5Y5/1灰色（シルト～極細粒砂）と
10YR5/6黄褐色（シルト～極細粒砂）の地山ブロック混入

図18　ＳＫ27土器出土状況

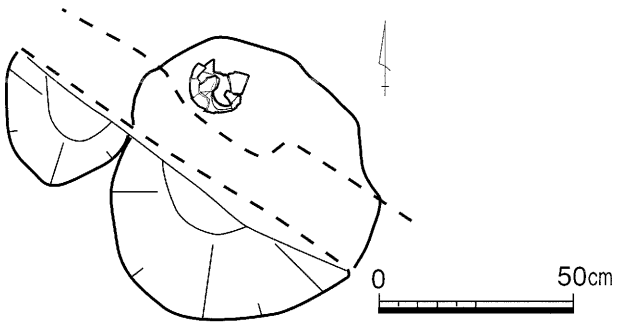
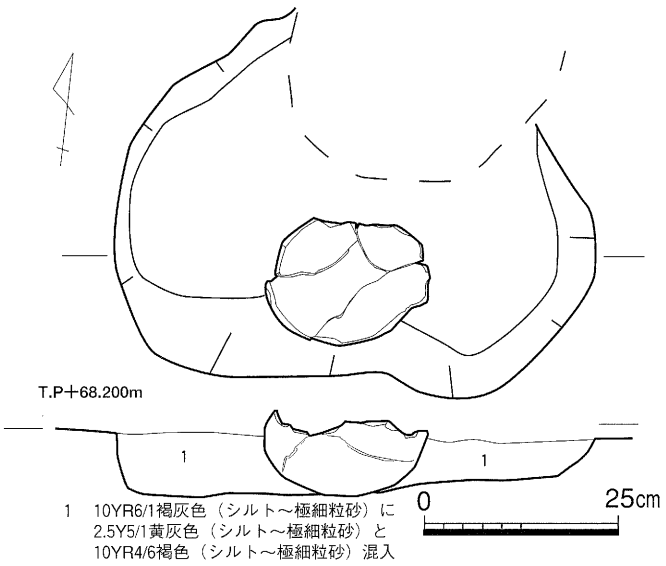


図19　ＳＫ29土器出土状況



1　10YR6/1褐灰色（シルト～極細粒砂）に
2.5Y5/1黄灰色（シルト～極細粒砂）と
10YR4/6褐色（シルト～極細粒砂）混入

図20　ＳＫ38土器出土状況

土のブロック状の混入が確認できたが、他の層では確認できず、先にみた人為的に埋め戻しがおこなわれたものと考えられる各遺構とは状況が異なる。

ＳＫ27

東西・南北方向軸約１ｍ方形状の土坑である。深さは、約15cmを測る。断面で確認できた層は１層でわずかではあるが地山土も混入している。土坑底面より約５cm～10cmほど浮いた状態で土師器の甕が出土している。

ＳＫ29

今次調査区で検出したピット状の遺構よりも一回り大きくまた、調査区側溝などにより、全体の規模が不明なため、土坑とした。概ね70cmほどの円形を呈す。深さは約20cmであった。遺構の北側より土師器の小型の甕が口縁部を斜め上方に向けた形で出土しており、口縁の一部は検出段階から露呈していた。

ＳＫ38

後世の耕地化によって設けられた溝（撹乱扱い）を掘削後検出した。東西方向軸約1.2南北方向軸約70cmで深さは約10cmを測る。遺構の南端ほぼ中央部で土師器の鉢が、口縁部を上方に向いた形で出土した。鉢の底部は遺構の底面と設置しており、いわば据えられた形となっている。埋土は１層のみで、まばらに地山土の混入するため、意識的に鉢を置き、周辺を埋めたものとも考えられるが、上面は削平を受けており、詳細は不明である。（藤田）

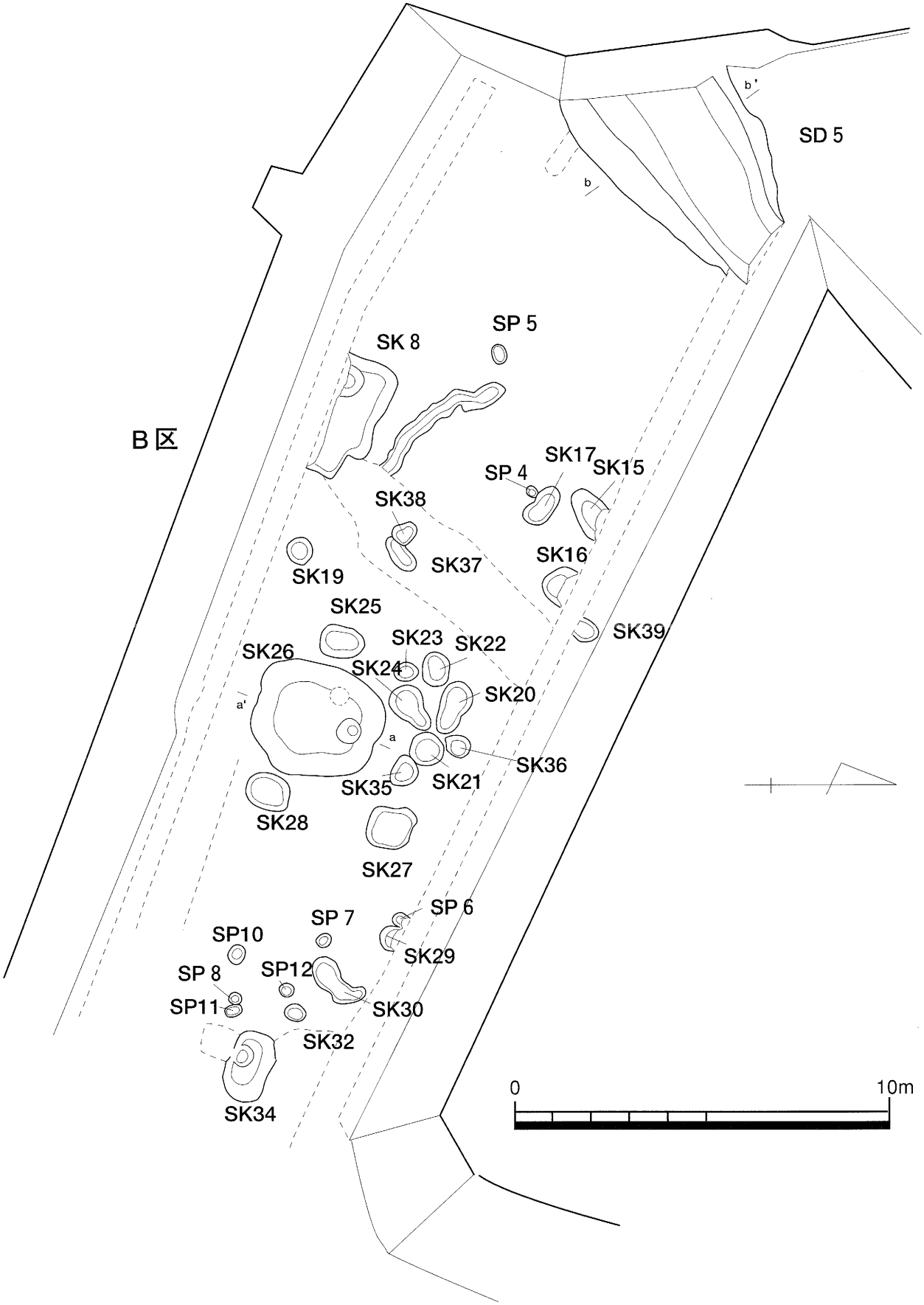

B区
SD 5
b'
b
SP 5
SK 8
SP 4
SK17
SK15
SK38
SK37
SK16
SK19
SK25
SK39
SK23
SK22
SK26
SK24
SK20
a'
a
SK36
SK35
SK21
SK28
SK27
SP 6
SP 7
SP10
SK29
SP 8
SP12
SP11
SK30
SK32
SK34
0
10m

図21　B区平面図

3．出土遺物

須恵器（図22・写真５）

杯

計９点である。Ａ２区ＳＤ1から杯Ａが１点、杯Ｂが２点、杯Ｂ蓋が１点、杯Ｈ蓋が２点、ＳＤ４から杯Ｈ蓋が１点、Ｄ区遺構面精査時に杯Ｇ蓋が１点、機械掘削時に杯Ｂが１点出土した。このうち図化できたのは、ＳＤ１出土の杯Ｂが１点（４）、杯Ｈ蓋が１点（１）、ＳＤ４出土の杯Ｈ蓋が１点（２）、Ｄ区精査時の杯Ｇ蓋が１点（３）、機械掘削時の杯Ｂが１点（５）である。（１）・（２）は法量やプロポーション、製作技法が類似するものであり、天井部外面４／５の範囲をヘラ切り後、未調整である。いずれも飛鳥Ⅱ期の所産と考えられる。（３）は天井部３／５の範囲にヘラケズリを施しており、また、鋭いかえりをもつ。飛鳥Ⅱ～Ⅲ期の所産と考えられる。（４）は完形の資料であり、口径からＢⅢであると考えられる。口径が11.6cm、器高が4.0cmを測り、径高指数は34前後である。底部外面にはヘラケズリが施されている。飛鳥Ⅳ期の所産と考えられる。（５）は口径からＢⅡであると考えられるが、底部が欠損しており、底部外面にヘラケズリが施されているかは不明である。

壺

計１点である。Ａ２区ＳＤ１から壺Ｋが１点（６）出土した。頸部と体部の接合痕が明瞭に残っている。

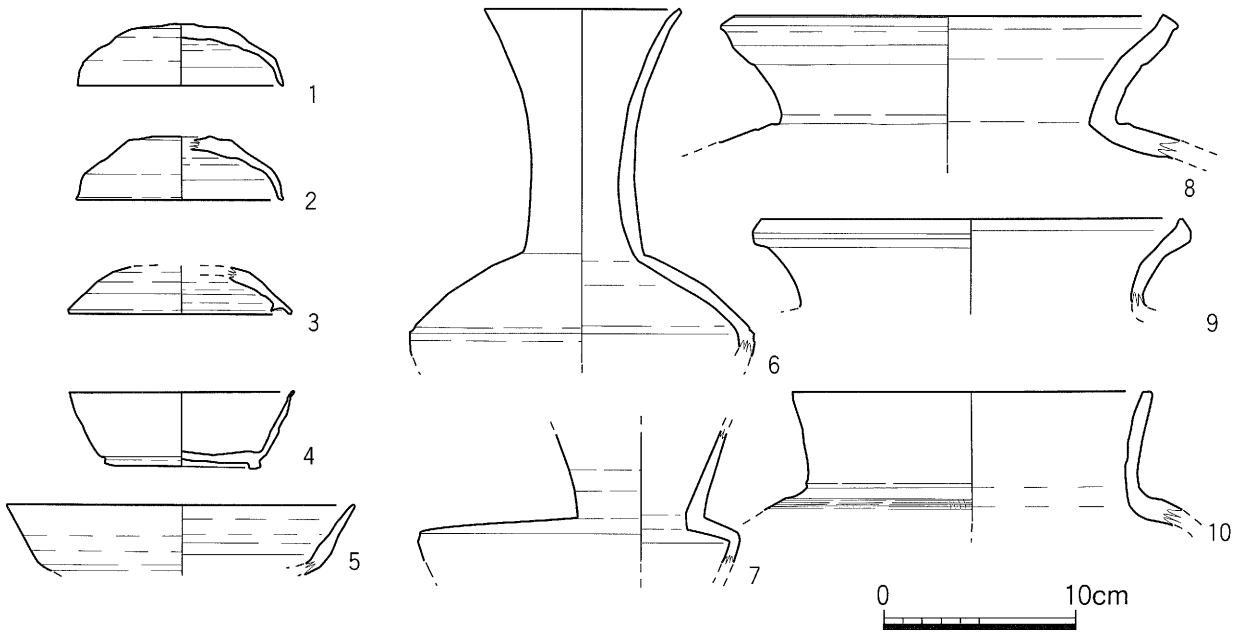


図22　須恵器

平瓶

計１点である。Ａ１区ＳＫ３から１点（７）出土した。平坦な上面と体部との間に稜をもつ。８世紀代の所産であると考えられる。

甕

計３点である。Ａ２区ＳＤ１から１点（８）、Ｂ区ＳＤ５から甕Ｂが１点（10）、Ｂ区の撹乱から１点（９）出土した。（８）・（９）は、口縁部から頚部にかけての資料であり、器高と体部最大径との関係が不明であるため、型式の判断はつかない。（10）は、口縁部を貼り付けた時の痕跡が明瞭に残っている。外面に平行タタキが、また、内面にはその当て具痕がみられる。

土師器（図23・写真６）

杯

計３点である。Ａ２区ＳＤ１から杯Ｂ蓋が１点、杯Ｃが２点出土した。このうち図化できたのは、Ａ２区ＳＤ１出土の杯Ｃが２点（11）・（12）である。口径から、どちらもＣⅢであると考えられる。（11）は、復元口径で約11.4cm（口縁部残存率１／６）であり、器高が推定で約3.5cmである。よって径高指数は30前後である。底部が欠損しており、底部外面にヘラケズリが施されているかは不明であるが、口縁部外面にヘラミガキ、内面に放射状の暗文が施されている。飛鳥Ⅱ期～Ⅳ期の範疇におさまるものと考えられる。（12）は口径が復元で約13.0cm（口縁部残存率１／６）であり、器高が推定で約3.0cmである。よって、径高指数は23前後である。底部が欠損しており、底部外面にヘラ削りが施されているかは不明であるが、口縁部外面、内面ともにヘラミガキは観察できない。飛鳥Ⅳ～Ⅴ期の所産のものと考えられる。

椀

計１点である。Ａ２区ＳＤ４から１点（13）出土した。口縁部と体部との間に明確な稜を持つ。摩滅が著しいため、調整は不明である。胎土や全体のプロポーションから10世紀～11世紀の所産であると考えられる。

皿

計２点である。Ａ２区ＳＤ１からⅢＡが２点（14・15）出土した。口径から、（14）はＡⅡ、（15）はＡⅠであると考えられる。（14）は摩滅が著しいため、ヨコナデを施していることが部分的に観察できる程度で、ヘラケズリやヘラミガキ調整の有無については不明である。（15）は底部外面に凹凸が著しく、ヘラケズリを施していないことがみてとれる。口縁部内面には放射状に暗文を施している。口縁部下半が内湾し、上半がわずかに外反する弧を描き、口縁端部は内側にまるく肥厚する。平城京Ⅲ期の所産であると考えられる。

ミニチュア高杯

計２点である。Ａ２区ＳＤ１から２点（16・17）出土した。（16）は完形の資料である。脚部外面に縦方向のヘラケズリを施している。（17）は脚部の資料で、脚部のヘラケズリは施されていない。

鉢

計１点である。Ｂ区ＳＫ38から鉢Ｂが１点（18）出土した。外面の調整は、多くのものにみられるようなヘラミガキでは無く、ハケが施されている。また、底部内面に有機物の付着がみられる。

甕

把手だけの資料も合わせて、計８点である。Ａ１区ＳＫ２から甕Ｂが１点（20）、ＳＫ７から１

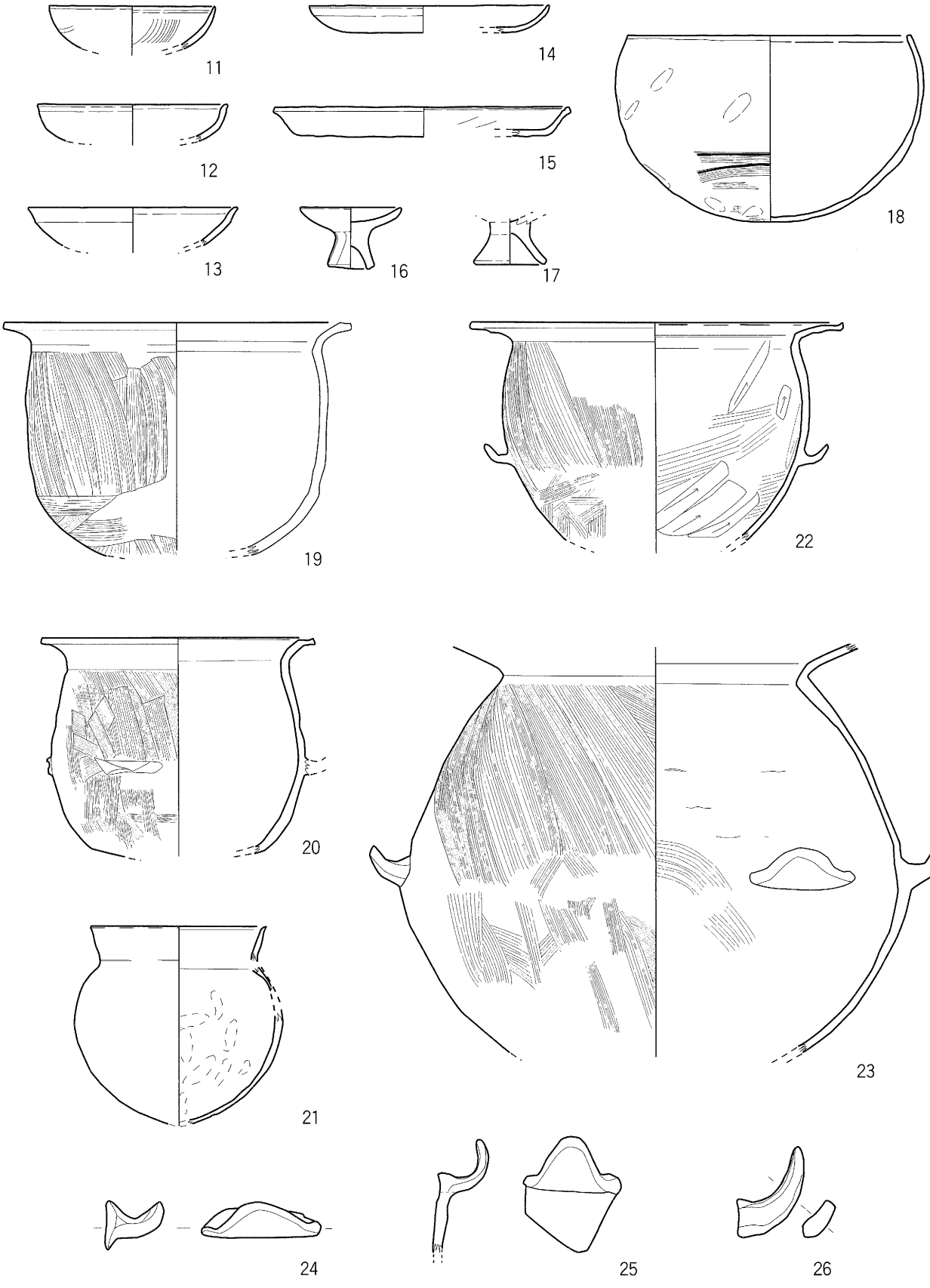


図23　土師器

点（19）、Ａ２区ＳＤ１から把手２点（24・26）、Ｂ区ＳＫ27から甕Ｂが１点（22）、ＳＫ33から把手１点（25）、ＳＫ29から小型の甕が１点（21）、試掘トレンチ９から甕Ｂが１点（23）、資料が出土した。（19）・（22）は外面にハケが施されているが、頸部から体部にかけては細かい原体の刷毛が使用され、体部から底部にかけては粗い原体の刷毛が使用されていることが観察される。（19）は、もともと把手を持たない資料なのか、または、たまたま残存部には把手がないのかの判断がつかないため、型式は不明である。（22）は、底部において、二次焼成痕がみられる。（20）は、内面において摩滅が著しい。外面にはハケが施されているが、今次調査で出土した他の甕と比べるとランダムに施されている。（21）は摩滅が著しいため、体部外面においてハケ、口縁部内面においてヨコナデが部分的にみられる程度であるが、体部内面においては、成形時の指圧痕がみられる。また、体部から底部外面にかけて二次焼成痕が確認できる。（23）は、他の甕の資料よりも体部の張りが強い。同一のハケで体部外面全体を調整していることが確認できる。これらの甕は、口縁部の外反度や把手の形状から平城京Ⅲ～Ⅴ期の所産のものと考えられる。（24）～（26）は把手のみの資料である。（24）・（25）は舌状の形状である。（25）については把手に体部が接合されていることが観察できるため、体部の成形段階で把手が組み入れられたと考えられる資料である。（26）は角状の形状である。（25）とは異なり、体部を成形した後に把手を貼り付けたと考えられる資料である。これらの把手はその形状から飛鳥～奈良時代の所産であると考えられる。（藤野）

瓦（図24～図27・写真７～写真９）

軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土している。量的には天平期に所属する瓦類が圧倒的に多いが、飛鳥期、白鳳期のものも出土している。以下に図示したものを個別に記述するが、記述にあたっての瓦の分類・用語はすでに刊行している『報告書』（栗田2003ａ）に従っている。

軒丸瓦（図24・写真７～写真８）

（１）軒丸瓦Ｌ群である。瓦当部は複弁８葉の「平城宮式」の瓦当文様をもつ。笵傷が瓦当面を横断して認められる２段階目の瓦笵を使用しての製品である。丸瓦部は欠失しているが、瓦当部裏面の状況からみて一本作りである。所属時期は天平期である。（事前調査Ｔ10出土）

（２）軒丸瓦Ｃ群である（写真７：２）。瓦当部は素弁10葉の蓮華紋軒丸瓦である。所属時期は飛鳥期である。（事前調査Ｔ５出土）

（３）素縁である外縁を除いて瓦当部が欠失しているが、接合された丸瓦部が行基Ｉ１Ｚａ［Ｃｈ］群であることからみて、瓦当部は軒丸瓦ＢあるいはＣであると推測できる（写真７：３）。瓦当部と丸瓦部の接合には丸瓦部広端面凹面側に楔形加工を施すｆ１手法を採用し、丸瓦部広端が外縁端から1.2cm前後離れた位置にくるように接合されている。丸瓦部に使用された布袋は「布袋ネ行基**２**」である。丸瓦部に新たな器具痕が認められた（写真７：３－３）。器具痕は直径0.8cm前後の円形に近い不整形の突出痕で、位置は広端から2.2cm上方のところに１つある。なお側縁側からの距離は、中央に向かって約6.5cmである。これと同じ器具痕は丸瓦（６）でも確認できていることから、詳細はそちらで述べる。所属時期は飛鳥期である。（事前調査Ｔ５出土）

（４）軒丸瓦Ｅ－行基Ｉ１Ｚａ［Ａｋ］群である（写真８）。瓦当部は素弁８葉の蓮華紋である。笵傷が中房の周りに２箇所で明瞭に認められる２段階目の瓦笵を使用しての製品である。軒丸瓦Ｅ群の丸瓦部に行基Ｉ１Ｚａ［Ａｋ］群が接合されることは、すでに想定されていたが（栗田2005ｂ；37頁）、

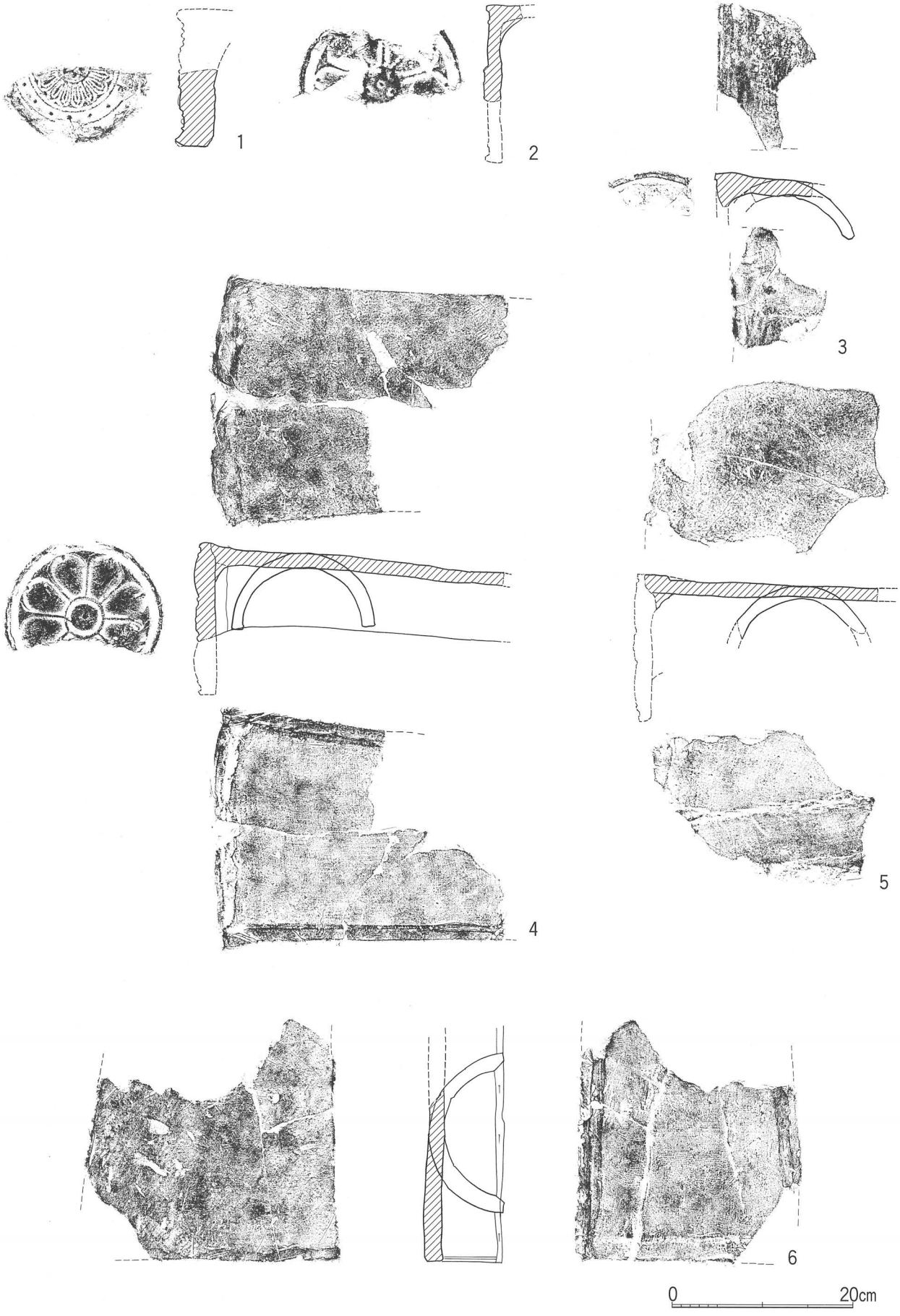


図24　軒丸瓦・丸瓦

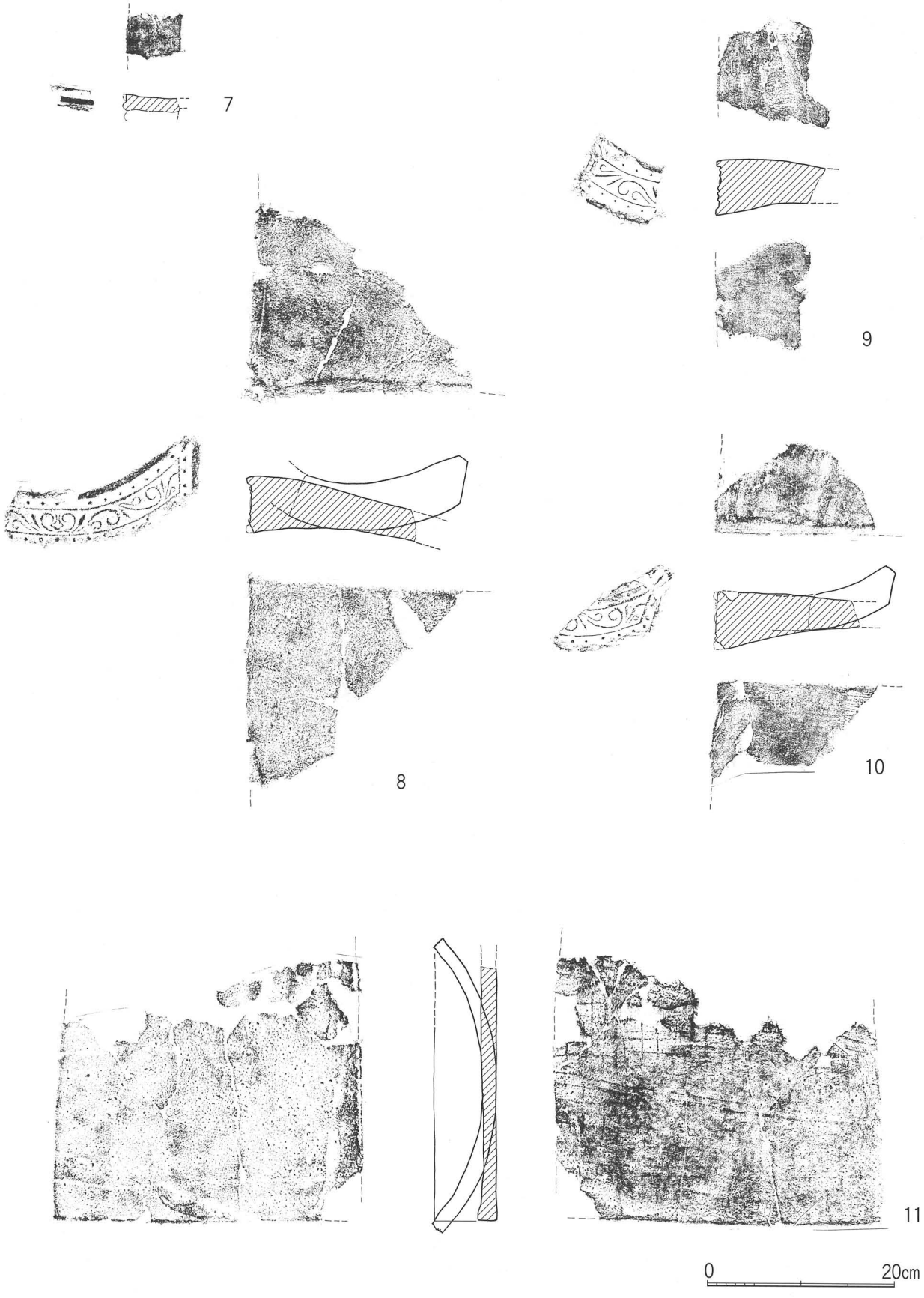


図25　軒平瓦・平瓦

実例として確認できたのはこの資料が初めてである（写真８：４－３）。丸瓦部に使用された布袋は「布袋ワ行基**0**」である（写真８：４－５）。瓦当部と丸瓦部の接合には丸瓦部広端面凹面側に楔形加工を施すｆ１手法を採用し、瓦当部裏面に挿入するように接合している。所属時期は飛鳥期である。（事前調査Ｔ５出土）

（５）瓦当部が欠失しているが、接合された丸瓦部からみて、軒丸瓦Ｄ－行基Ｉ１Ｚａ〈xv〉群であることは識別できる（写真８：５）。丸瓦部に使用された布袋は「布袋ワ行基**2**」である。この布袋は布の破れ具合から時間差をみることができるが、この丸瓦部に使用されているのは破れる前のものである（写真８：５－３）。既往の調査でも破れる前の布袋が軒丸瓦の丸瓦部を製造するために使用され、普通の丸瓦には破れてからの布袋を使用していることが確認されている（粟田2003；158・163頁）。所属時期は飛鳥期である。（事前調査Ｔ５出土）

これらのほかに小片であったため図示できなかったが、外縁に重圏文のある「山田寺式」の瓦当文様をもつ軒丸瓦が出土している。所属時期は白鳳期である。（Ａ１区ＳＫ２出土）

丸瓦（図24）

（６）行基Ｉ１Ｚａ［Ch］群である（写真７：６）。軒丸瓦（３）に接合された丸瓦部と同じ型木と同じ布袋を使用して造られている。丸瓦部に使用された布袋は「布袋ネ行基**2**」である。すでに述べたとおり新たな器具痕として広端から2.2cm上方のところに1つ、直径0.8cm前後の円形に近い不整形の突出痕が認められた（写真７：６－４）。なお側縁側からの距離は軒丸瓦では6.5cmであったが、丸瓦では4.5cmとより側縁側に近い。この距離差の原因については、側縁凹面側が面取りされているため分割指標の装置の有無が確認できていないので判明していない。ところで既往の調査で「布袋ネ行基**2**」を被せた型木としては、すでに型木Ｉ１①が確認されている。型木Ｉ１①にみる器具痕は円形の窪み痕で、広端から13.5cm上方と18.5cm上方にほぼ直線上に２つ並んでいる（粟田2005ｂ；24－29頁）。ただし型木Ｉ１①にみる器具痕位置は一個体で確認できたのではなく、複数個体を繋ぎ合わせての決定であることは改めて述べておかねばならない。すなわち、布袋に「布袋ネ行基**2**」を使用した中央のみ残存の丸瓦（行基54）に残る２つの窪み痕と、同じ布袋を使用した狭端から中央にかけて残存する丸瓦（行基50）に残る１つの窪み痕を同じ型木上にみる（上側の）器具痕と想定して狭端側からの位置を確定した。そののち器具痕は確認されていないものの全長の分かる丸瓦に重ね合わせて広端側からの器具痕の距離を決定した。そのため、型木Ｉ１①に関しては広端部の状況を実際に把握できた上での確定ではない。器具痕から想定される飛鳥期の丸瓦の製造に用いられた型木は全部で７種類ある。それらのなかで器具痕が窪み痕として認められるのは型木Ｉ１①だけで、器具痕の確認できなかった型木Ｉ２①を除いて、ほかはすべて突出痕である。また、その位置も型木Ｉ１①が丸瓦の中央部に近い比較的上方にあるのに対して、ほかのものは広端側に近い。今回確認された器具痕は、ほかの例にもみるように突出痕で、なおかつ広端側にきわめて近い位置にある。このことからこの器具痕がすでに確認されていた型木Ｉ１①にみた２つの窪み痕と同じ型木上の別の装置と考えるか、まったく別の型木であるとするかは判断が分かれるところであろう。はたしてこの丸瓦（６）には、新たに認定した突出痕とともに複数の窪み痕も観察できた。ただしこれらの窪み痕を器具痕と確定するには、条件が悪いことを述べておかねばならない。すなわち、窪み痕の観察できる位置には布袋の綴じ合わせ痕が重複し、さらにその綴じ合わせ痕に沿って丸瓦が破損しているからである。そのうえ、窪み痕は先に示した２ケ所だけでなく、さらに下方、つま

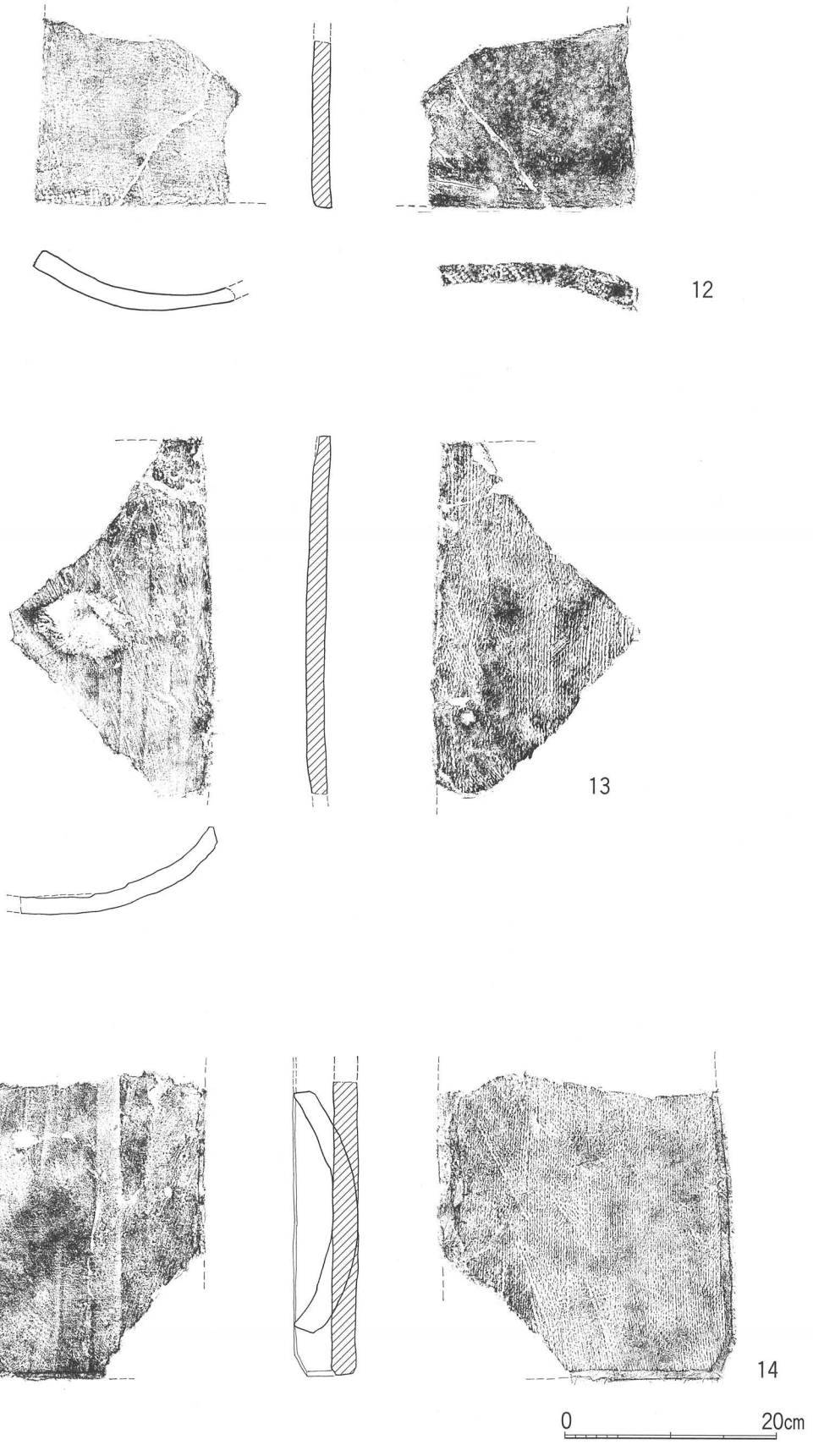


図26　平瓦

り広端から8.5cm上方にも窪み痕が観察でき、計３ケ所になってしまった。これらをすべて含めて器具痕と認定するにはその条件が悪すぎ、一例だけで結論をくだすには躊躇される。そこで今のところ一つの型木に認められる器具痕とみるか、別の型木とみるかの結論は保留しておくことにする。所属時期は飛鳥期である。（事前調査Ｔ８出土）。

軒平瓦（図25、27）

（７）軒平瓦ＡＡ２－平瓦Ⅱ０Za〈ii〉群で、「山田寺式期」の軒丸瓦と組み合う四重弧文の軒平瓦である。布袋には「布袋リ平**０**」を使用する。所属時期は白鳳期である。（Ａ区機械掘削で出土）

（８）軒平瓦Ｐ－平瓦Ⅲ２Za［J2aj］群、平城宮6664型式系の唐草文の軒平瓦である。使用布は不明である。所属時期は天平期である。（Ｄ区ＳＤ７－１層出土）

（９）軒平瓦Ｐ－平瓦Ⅲ２Za群で、平城宮6664型式系の唐草文の軒平瓦である。使用布は不明である。所属時期は天平期である。（Ａ区機械掘削で出土）

（10）軒平瓦Ｐ－平瓦Ⅲ２Za［J2aj］群で、平城宮6664型式系の唐草文の軒平瓦である。使用布は不明である。所属時期は天平期である。（Ａ区機械掘削で出土）

平瓦（図26、27・写真９）

（11）平瓦Ⅱ０Za［Ｂa］群である（写真９：11）。全体に摩滅が著しいため布袋の識別は困難であるが、広端側に幅広の足し布をするという特徴的な綴じ合わせ痕からみて「布袋ヨ＋イ平**１**」の可能性が高い。この観察が正しければ平瓦Ⅱ０Za［Ｂa］群での「布袋ヨ＋イ平**１**」の使用例の初出になる。なお、「布袋ヨ＋イ平**１**」の使用は平瓦Ⅱ０Za［Ａm］群と（粟田2003ａ；188頁）、平瓦Ⅱ０Za［Ａa］群（粟田2005ａ；26頁）で確認されている。これらの平瓦は、すでに同じ「造瓦単位」の所産であることが確認されていたが（粟田2005ｂ）、今回の布袋の使用状況からも、その事実が追認されたことになる。所属時期は飛鳥期である。（Ａ１区ＳＫ10出土）

（12）平瓦Ⅱ０Za［Ａg］（＋Ｂt）群である。布袋には「布袋ニ平**０**」を使用する。補助叩き（＋Ｂt）は端面と、凸面、凹面の広端側に施されている。所属時期は飛鳥期である。（事前調査Ｔ８出土）

（13）平瓦Ⅱ１J1d群である。布袋には「布袋レ平**０**」を使用する。所属時期は天平期である。（Ａ１区ＳＫ11出土）

（14）平瓦Ⅱ１J1c群である（写真９：14）。布袋には「布袋レ平**０**」を使用する。所属時期は天平期である。（Ａ１区ＳＫ２出土）

（15）平瓦Ⅲ２J2aq群である。叩き板［J2aq］は板に巻き付けた縄目のずれ方によって時間差が窺える（粟田2003a；100頁）。（15）には縄目がずれる前の０段階のものが使われている。「布ツ」を使用する。所属時期は天平期である。（Ａ１区ＳＫ11出土）

（16）平瓦Ⅲ２J2aq群である（写真９：16）。叩き板は平瓦（15）に使用された叩き板より時間が遅れる１段階目のものが使用されている。「布ツ」を使用する。所属時期は天平期である。（Ａ１区ＳＫ11出土）

石器（図28、29・写真10）

サヌカイト製の石器遺物のうち、トゥールだけを報告する。なお、リタッチの記述については（山中1978、1994）に、大型打製石器の「類」分類は（粟田2003ｂ）に従う。

大型打製石器（図28）

（1）残存長111.3㎜、最大幅43.6㎜、最大厚13.0㎜を測る。尖端部は尖端からの衝撃によって欠失し

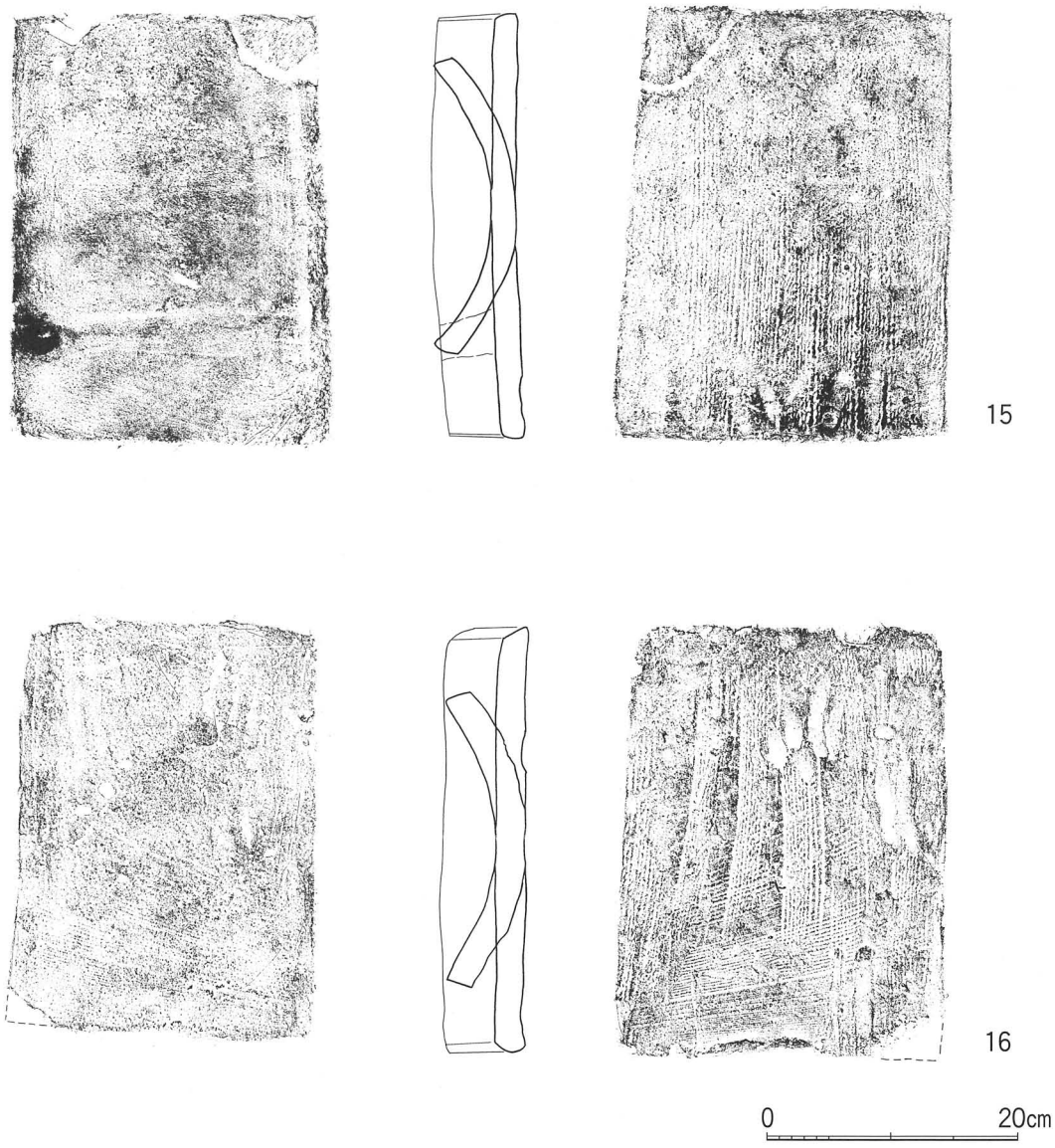


図27　平瓦

ている。刃部の幅が肥大し、全体形は矢印状を呈す。尖端刃部開き角は103度を測る。Ⅲ－２類に分類できる。刃部長43.6㎜、基部長68.7㎜で、刃部の範囲は全長の３分の１に足らない。基部は基端部縁の近くで張り出す。全長が短いため直接手で持つ使用よりも、柄を装着しての使用を想定する必要を感じさせる。ただし基端部縁の張り出しをみると、石器の器軸方向に基部を挟み込んでの着柄では、基端部縁の張り出し部がじゃまになる。器軸方向と直交する方向での着柄も考えておかねばならない。いずれにしてもその柄の実際を推測するのは難しい。（Ａ２区ＳＤ１出土）

（２）残存長61.0㎜、最大幅33.3㎜、最大厚13.9㎜を測る。中央部近くで、側縁から衝撃を受けて欠失している。尖端部の欠損は新しい。Ⅰ類に分類できる。（Ｂ区中央攪乱出土）

ピエス・エスキエ（図28）

（３）最大長29.7㎜、最大幅30.1㎜、最大厚5.0㎜を測る。平形細部調整は２端部にある。縁部は片側が厚形（一部薄形）・深形・直線・表面細部調整、反対側が端面側からの折れ面である。（Ｂ区地山直上で出土）

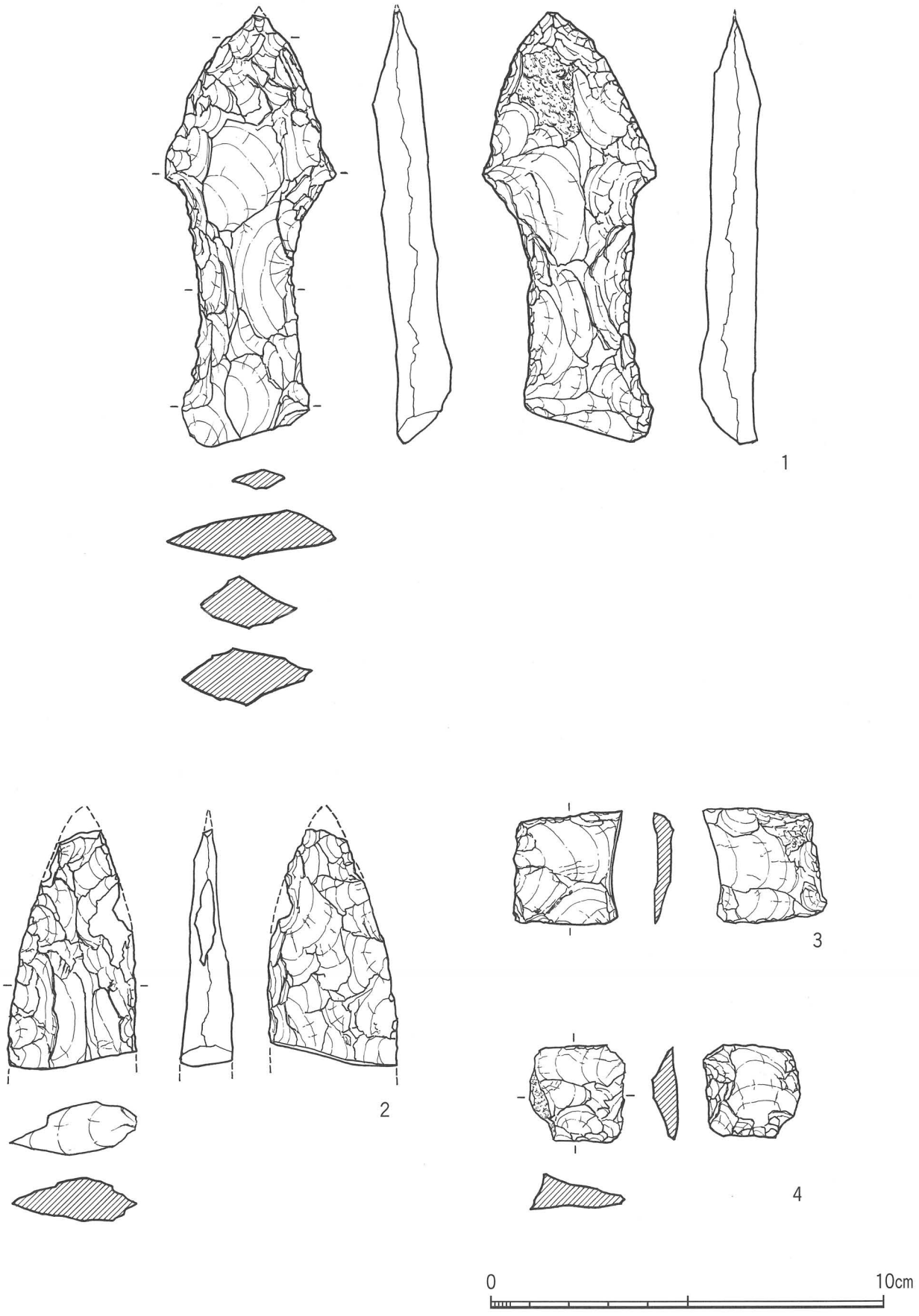


図28　大型打製石器・ピエスエスキエ

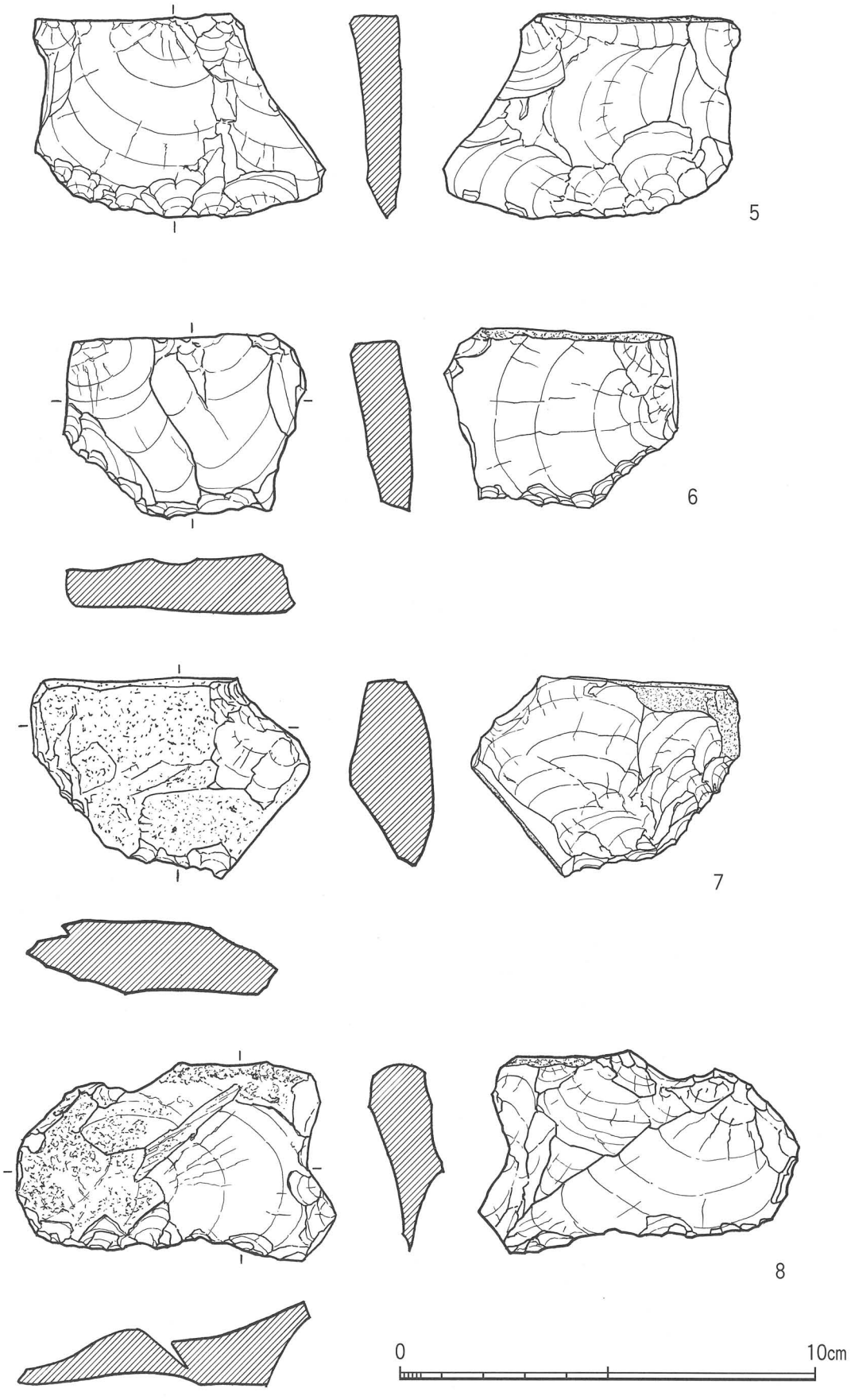


図29　削器

（４）最大長24.6㎜、最大幅23.4㎜、最大厚9.2㎜を測る。平形細部調整は２端部１縁部にある。残りの１縁部は原面である。（Ｂ区地山直上出土）

削器（図29）

（５）凸刃削器である。最大長50.1㎜、最大幅68.4㎜、最大厚13.4㎜を測る。刃部を作り出すためのリタッチは薄形・深形・凸形・連続・両面細部調整である。（Ａ２区ＳＤ２出土）

（６）複刃削器である。最大長41.4㎜、最大幅59.4㎜、最大厚12.0㎜を測る。剥離面を打面にする縦形剥片の右側縁部に刃部を作り出している。刃部を作るためのリタッチは、薄形・浅形・凹形・連続・裏面細部調整と厚形・深形・凹形・連続・表面細部調整が重複するものと、薄形・浅形・直線・連続・裏面細部調整と厚形・深形・直線・連続・表面細部調整が重複するものがある。（Ａ２区ＳＤ１断面畦出土）

（７）複刃削器である。最大長47.3㎜、最大幅67.1㎜、最大厚20.3㎜を測る。刃部を作り出すためのリタッチは薄形・深形・直線・連続・両面細部調整、薄形・深形・凸形・連続・両面細部調整、厚形・深形・凹形・連続・両面細部調整である。（Ｄ区ＳＤ７－１層出土）

（８）複刃削器である。最大長46.9㎜、最大幅77.1㎜、最大厚12.5㎜を測る。刃部を作り出すためのリタッチは薄形・深形・凹形・連続・両面細部調整と、薄形・深形・直線・連続・両面細部調整である。（Ｂ区地山直上出土）（粟田）

参考文献

粟田　薫（2003ａ）「第Ⅲ章　遺物の読み」、粟田薫（編）『新堂廃寺・オガンジ池瓦窯・お亀石古墳』本文編（富田林市埋蔵文化財調査報告35）、富田林（大阪）、84－242頁。

粟田　薫（2003ｂ）「弥生時代のサヌカイト製大型打製石器の研究」（上）（下）『古代文化』、第55巻第１・３号、京都、20－37頁・22－38頁。

粟田　薫（2005ａ）「出土遺物」、藤田徹也（編）『新堂廃寺跡 宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告』（富田林市遺跡調査会報告26）、富田林（大阪）、14－29頁。

粟田　薫（2005ｂ）「新堂廃寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究」、山中一郎（編）『大阪府富田林市所在 新堂廃寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究』（京都大学総合博物館平成17年度春季企画展示のための研究成果）、京都、17－174頁。

山中一郎（1978）「森の宮遺跡出土の石器について」、八木久栄（編）『森の宮遺跡第３・４次発掘調査報告書』大阪、145－147頁。

山中一郎（1994）『石器研究のダイナミズム』高槻（大阪）。

第4章　まとめ

新堂廃寺の西側は、今次調査の範囲で概ね終了した。調査前は、寺域北側の調査（井西1996・1997）で検出された掘立柱建物群と庇付の掘立柱建物群が検出された今次調査区の南側に位置する2004年度の調査（粟田・藤田2005）を繋ぐ位置として、掘立柱建物等の住居関連遺構や、あるいは新堂廃寺とオガンジ池瓦窯の中間に位置することから、生産遺構等の検出なども想定されていた。

しかし、今次調査区では、掘立柱建物等の検出はできず、また、ピットも遺構全体量としては少量で、B区でわずかに検出されたにすぎない。調査対象範囲の中心部が未調査であるため、必ずしも掘立柱建物がないとは言い切れないものの、寺域北側や寺域南西側とは性格の異なった地区であったと考えられる。

特にA1区・B区で検出した土坑と類似する規模の遺構は、2004年度の調査A区でも検出されており、この周辺一帯に径2mほどの土坑が密集していたことが想定される。これらの遺構は、いずれも最終埋没段階が天平期頃であると考えられる。本文で示したようにこれらの土坑は、人為的な埋め戻しによって埋没と想定できるものが多く、出土した遺物の時間幅を考えても、後世に埋められたものではなく、遺構掘削後、ほぼ同時期のうちに埋められたものと考えられる。

これらの土坑が、どのような目的で掘削され、またどのような理由で埋められたものであるかは不明であるが、土坑底面で検出したピット状の落ち込みは、掘削後、水が沸き、時間とともに土坑内に水が溜まる状況がみられた。推測の域をでないが、一種の水貯め的な遺構であると考えることも可能であろう。深度の浅い土坑から出土した土器の中で甕が多かった事も、一助になろう。

以上の調査成果や2004年度の掘立柱建物6（粟田・藤田2005）の柱穴に敷かれていた瓦が未使用品の可能性が高い天平期の瓦であることを考えると、新堂廃寺域西側一帯は、概ね天平期頃に開発されたものと考えられる。

今次調査区は、2004年度におこなった調査と同様に宅地部分以外の道路施設部分においてのみの調査であったため、調査対象範囲の中心は未調査となり、全容が解明されたとは言えない。現在、富田林市教育委員会でおこなっている史跡整備調査の最終報告の段階で、既往の調査成果も含めた周辺地域一帯の様相も考えなければならないだろう。今次調査の成果は、そうした周辺地域様相の一齣である。（藤田）

参考文献

粟田薫・藤田徹也（2005）『新堂廃寺跡 宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告』（富田林市遺跡調査会報告26）、富田林（大阪）。
井西貴子（1996）『新堂廃寺発掘調査概要』（大阪府教育委員会刊行）、大阪。
井西貴子（1997）『新堂廃寺発掘調査概要Ⅱ』（大阪府教育委員会刊行）、大阪。

報告書抄録

ふりがな	しんどうはいじあと　に
書名	新堂廃寺跡　Ⅱ
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告
巻次	
シリーズ名	富田林市文化財調査報告
シリーズ番号	39
編著書名	藤田　徹也（編）　栗田　薫　藤野　好博
編集機関	富田林市教育委員会
所在地	〒584－8511 大阪府富田林市常盤町１番１号　☎0721－25－1000
発行年月日	西暦2007年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
新堂廃寺跡 （しんどうはいじあと）	富田林市（とんだばやしし） 緑ヶ丘町（みどりがおかちょう）1542番1	27214	17	34° 30′ 36″	135° 35′ 59″	2006. 5.1 ～ 2007. 3.31	1200	宅地造成に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新堂廃寺跡	寺院	奈良時代～ 中世	溝 ピット 土坑	土師器 須恵器 瓦 石器	特になし

図　　版

調査区　遠景（北西から）

調査区　遠景（南西から）

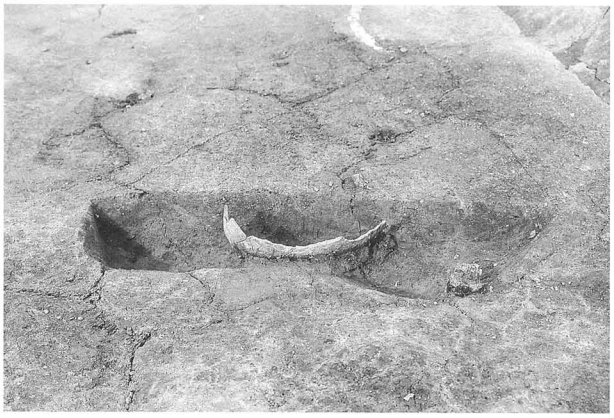
調査区　全景（南から）

Ａ２区　完掘状況

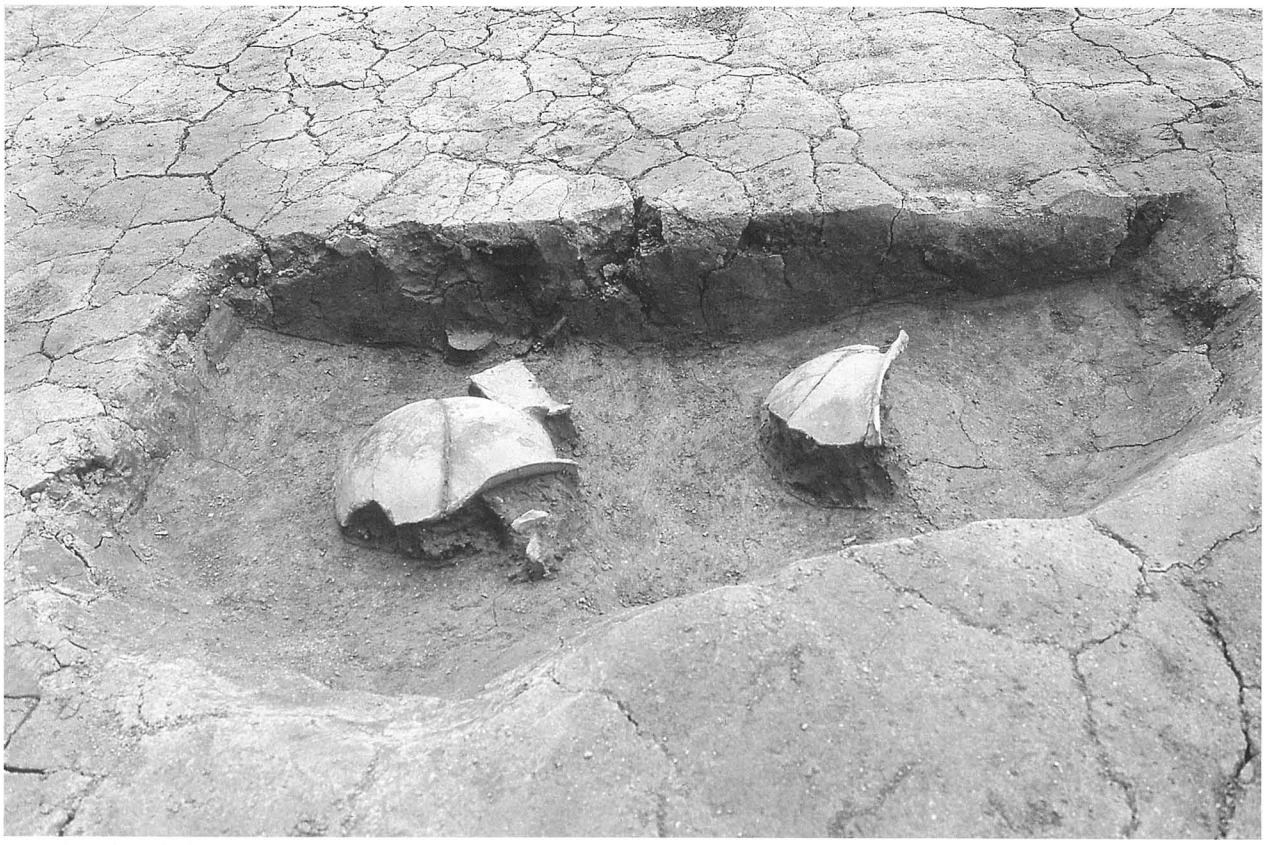
ＳＫ３　土器出土状況

ＳＫ７　土器出土状況

ＳＫ29　土器出土状況



ＳＫ38　土器出土状況

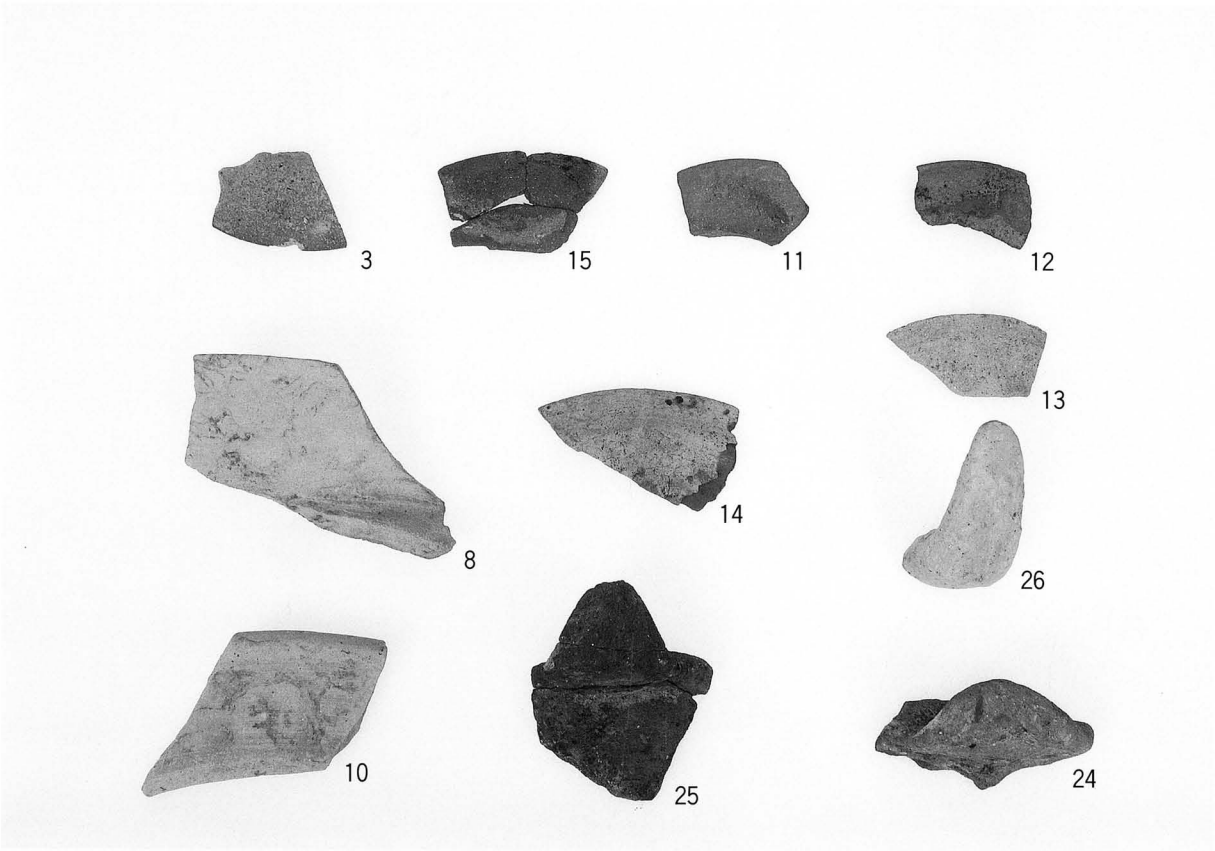


ＳＫ27　土器出土状況

A１区・B区　土坑群

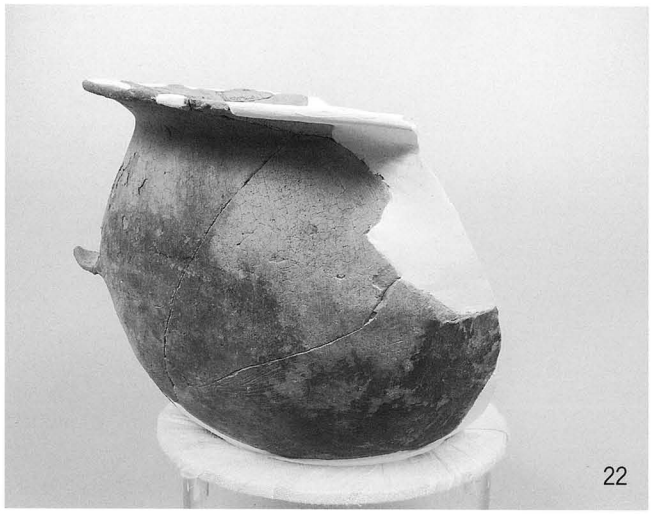
A１区　全景（南から）

B区　全景（東から）



出土遺物　須恵器・土師器

18


22

20

23

19

21

16

17

出土遺物　土師器

2－1

2－2

軒丸瓦C群

3－1

3－2

軒丸瓦（BまたはC）－行基I1Za［Ch］群．凸面　斜格子叩き［Ch］．　凹面　布袋ネ行基**2**，器具痕．

3－3

凹面　不整形凸形器具痕．

6－4

凹面　不整形凸形器具痕．

6－1

6－2

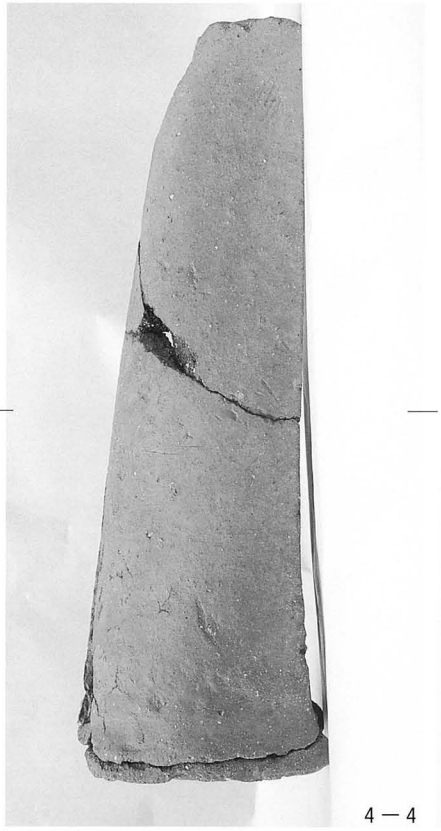
6－3

行基I1Za［Ch］群．凸面　斜格子叩き［Ch］．　凹面　粘土板重ね目，布袋ネ行基**2**，器具痕．

4－1

4－2

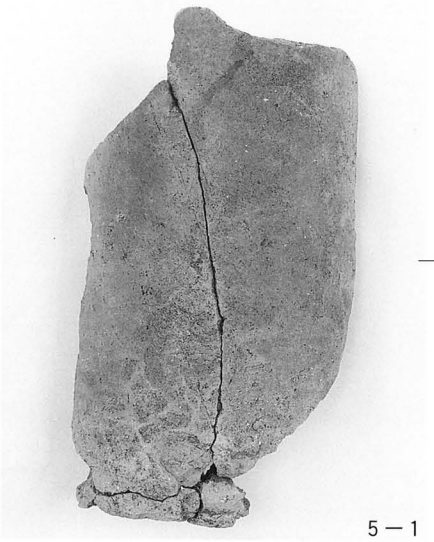
4－3



4－4

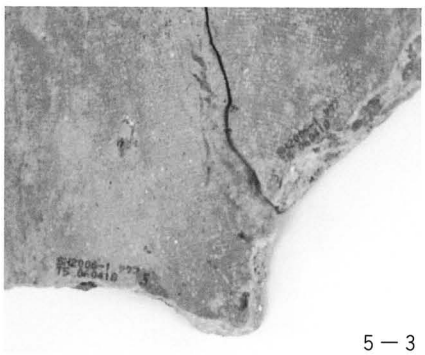
4－5

軒丸瓦E－行基Ⅰ1 Za［Ak］群．笵傷2段階目．凸面　平行叩き［Ak］．　凹面　粘土板重ね目，布袋7行基**0**



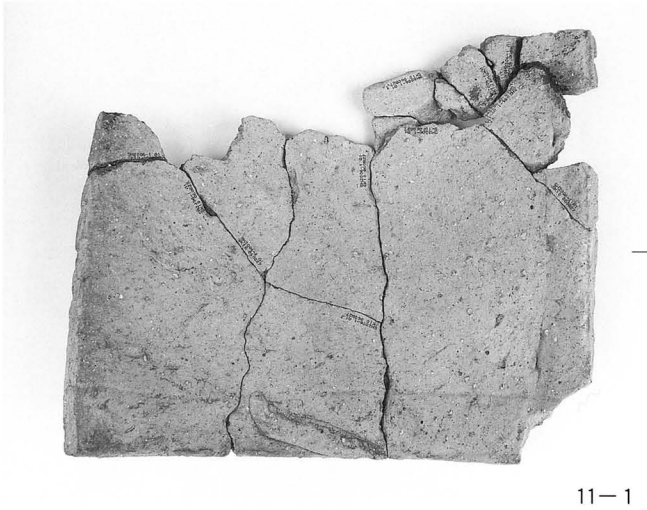
5－1

5－2



5－3

軒丸瓦D－行基Ⅰ1 Za［xv］群．凹面　粘土板重ね目，布袋ワ行基**2**（斫れる前に使用）



11－1

11－2

平瓦Ⅱ0Za［Ba］群．凹面　粘土板重ね目，布袋ヨ＋イ平1，分割界線．凸面　正格子叩き［Ba］．

14－1

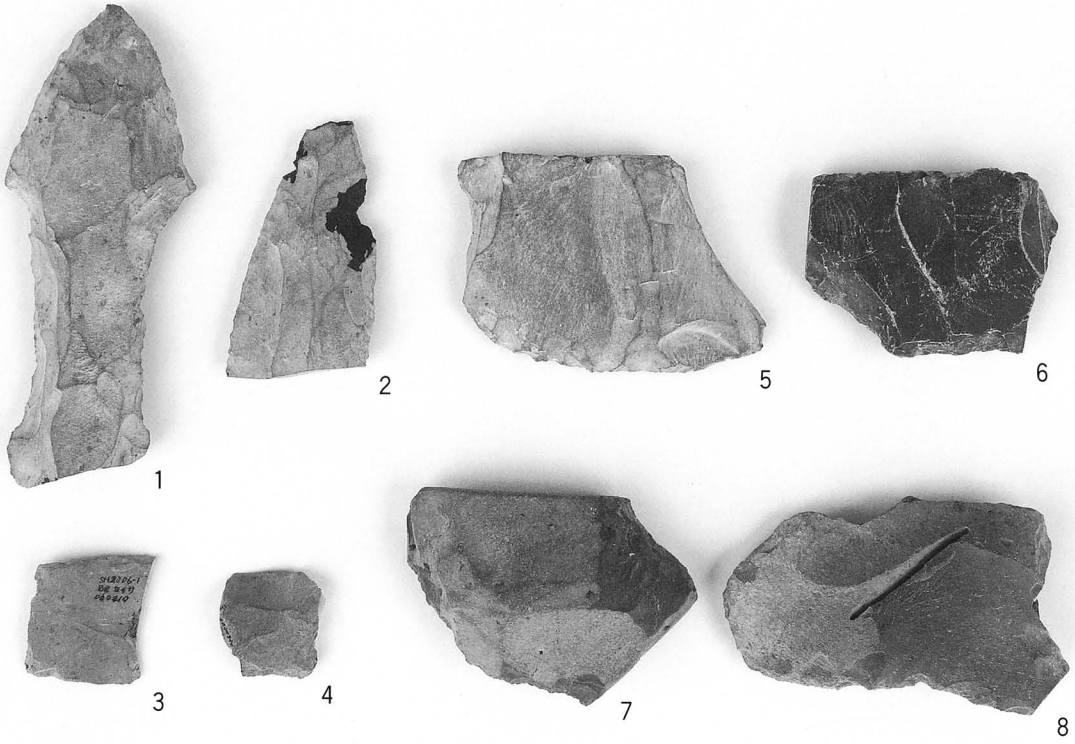
14－2

平瓦Ⅱ1JIC群．凹面　糸切り痕，粘土板重ね目，布袋レ平0，凸面　縄目叩き［JIC］．

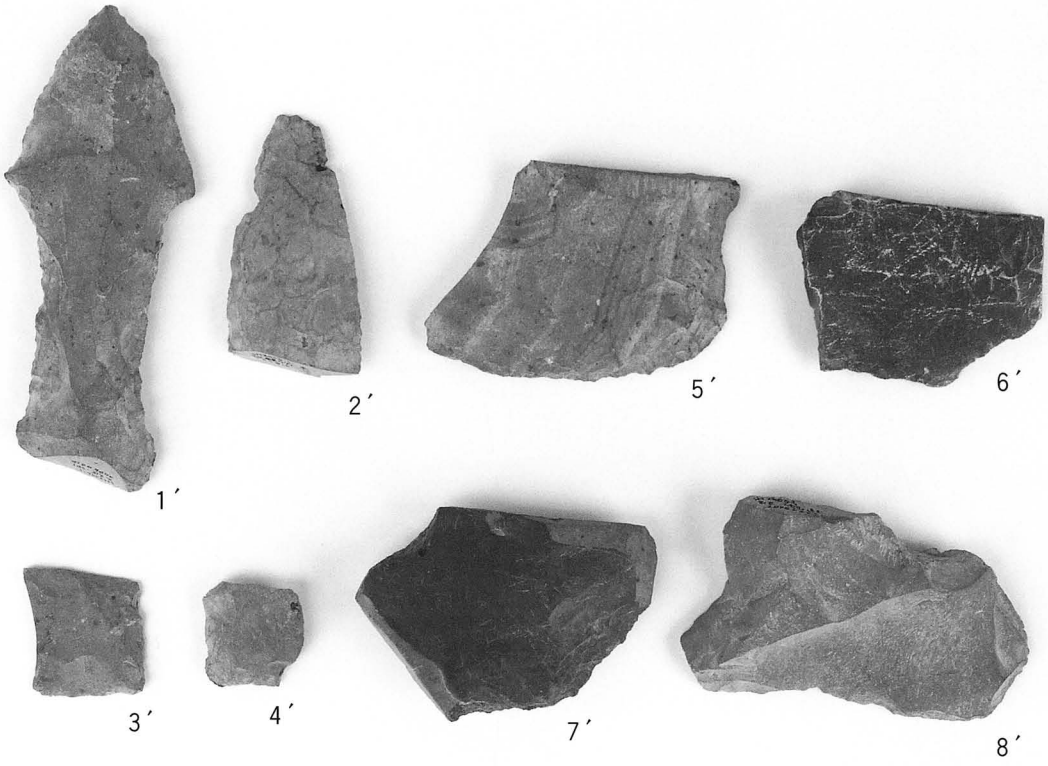
16－1

16－2

平瓦Ⅲ2　J2aq群．凹面　糸切り痕，布ツ，凸面　糸切り痕，縄目叩き［J2aq］．



石器（表面）



石器（裏面）

新 堂 廃 寺 跡 Ⅱ

発行年月日　2007年３月31日
編集・発行　富田林市教育委員会
住　　所　富田林市常盤町１番１号
印　　刷　橋本印刷株式会社

2007．300